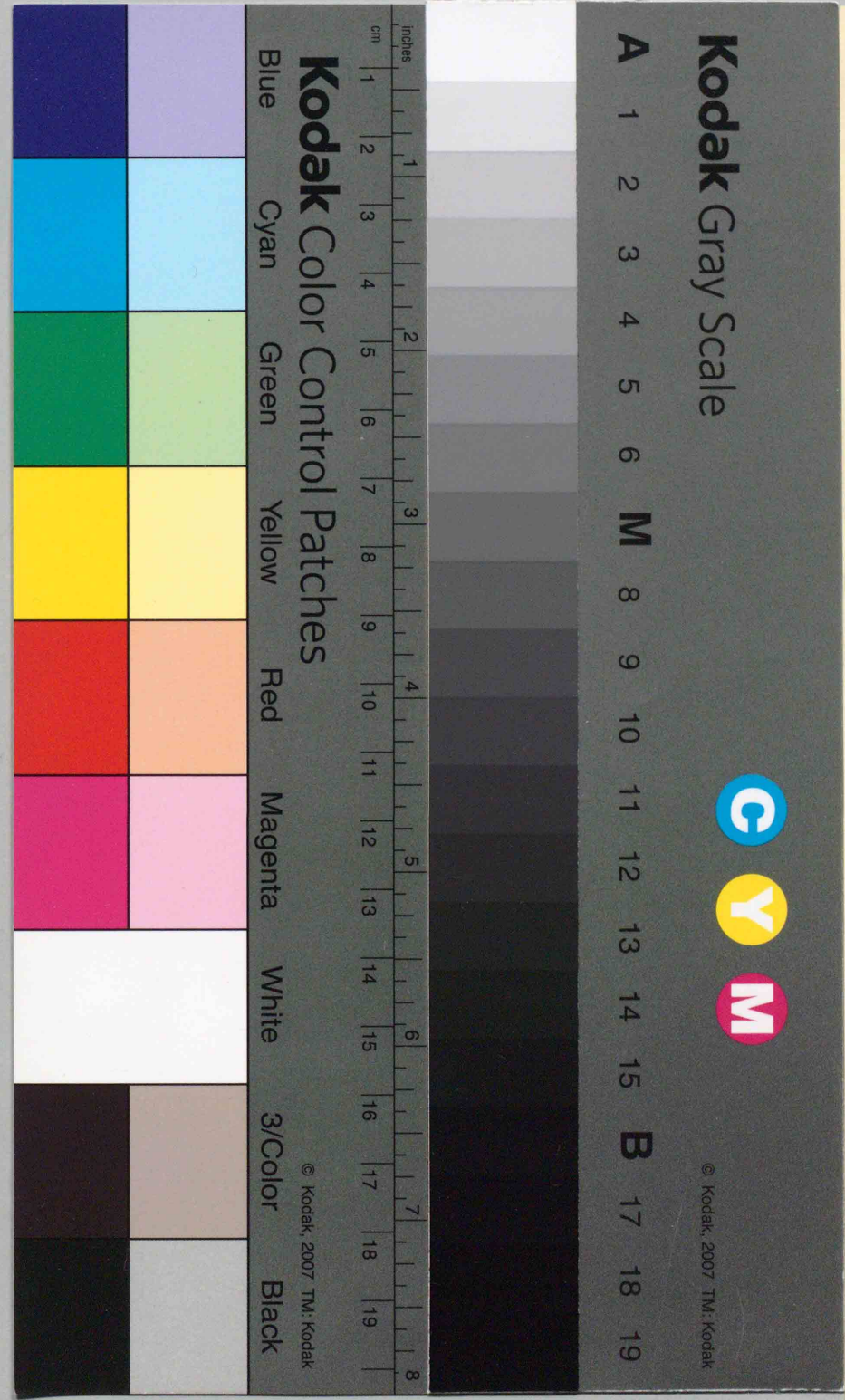


廣 島 縣  
青 年 學 校 農 業 教 科 書



廣 島  
廣 文 館

教科書文庫  
4  
610  
44-1938  
2000018056



43322

教科書文庫

4
610
44-1938
20000 18056



資料室  
中央図書館

395.9  
H118

教科書文庫  
4  
610  
44-1938  
2000018056

縣 島 廣

書科教業農校學年青



篇 物 作

広島大学図書  
2000018056



島 廣

館 文 廣

書  
島  
大  
学  
図  
書  
館



広島大学  
18056  
図 書 館

廣島縣  
青年學校農業科教科書

廣島大學  
圖書印



凡例

- 一、本書は廣島縣青年學校用教科書として編纂したるものなり。
- 一、本書は普通作物並に特用作物に就いて研究せんとする者の指針として編纂したるものにして大體甲種農業學校程度を標準とし努めて煩を避け要を撮るに意を用ひたり。
- 一、本書は青年學校に於いて一週二時間一學年三十週の教授に適合するやう編述したり。
- 一、諸子は須らく本書によりて普通作物に關する一斑を學び更に教師につき又實地に當りて漸次研究せられんことを望む。

凡例

作物篇

目次

第一編	普通作物	一
第一章	稻	一
第一節	性狀用途	一
第二節	品種	六
第三節	氣候土質	八
第四節	選種浸種	九
第五節	苗代	二
第六節	本田	五
第七節	收穫調製	三
第八節	依裝	三
第九節	貯藏販賣	六
第十節	補足	三
第二章	麥類	三
第一節	大麥	三

目次

目次

第二節 小麥…………… 四

第三節 選種と麥奴豫防…………… 五

第四節 栽培法…………… 七

第五節 收穫調製…………… 八

第三章 荳菽類…………… 四

總說…………… 四

第一節 大豆…………… 五

第二節 小豆…………… 五

第三節 豌豆…………… 五

第四節 蠶豆…………… 五

第二編 特用作物…………… 六

第一章 蘭草…………… 六

第一節 性狀現況…………… 六

第二節 品種…………… 六

第三節 氣候土質…………… 六

第四節 採種育苗…………… 六

第五節 栽培法…………… 六

第六節 收穫染土乾燥…………… 七

目次

第七節 貯藏選別…………… 七

第八節 蘭草の跡作…………… 七

第二章 煙草…………… 七

第一節 性狀來歴現況…………… 七

第二節 氣候土質…………… 七

第三節 栽培法(米國種)…………… 七

第四節 乾燥室…………… 八

第五節 收穫乾燥…………… 八

第三章 除蟲菊…………… 八

第一節 性狀用途…………… 八

第二節 品種氣候土質…………… 八

第三節 栽培法…………… 八

第四節 收穫病害輸出…………… 八

第四章 蒟蒻…………… 八

第一節 性狀用途…………… 八

第二節 來歴現況…………… 九

第三節 品種氣候土質…………… 九

第四節 栽培法…………… 九



広島縣農業教科書

# 普通作物篇

広島縣教育會 共編  
広島縣青年教育研究會

## 第一編 普通作物

### 第一章 稻

#### 第一節 性狀用途

##### 性狀

稻は禾本科に屬する一年生草本にして、根は麥類と同じく鬚根にして種根冠根の別あり。種子發芽の際生ずるは種根にて、後に生ずるものは冠根なり。冠根の發生は最下の莖節より始まりて漸次上方に向ひ、分蘖の節よりも亦生ず。養分は主として冠根に

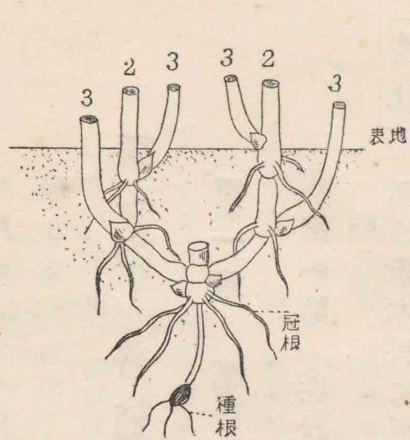
第一編 普通作物 第一章 稻

目次

第五節	收穫製粉	一〇三
第五章	茶	一〇四
第一節	性狀用途	一〇四
第二節	來歴現況	一〇四
第三節	品種氣候土質	一〇六
第四節	栽培法	一〇七
第六章	大麻	一一三
第一節	性狀用途	一一三
第二節	來歴現況	一一三
第三節	品種氣候土質	一一三
第四節	栽培法	一一四
第五節	收穫調製	一一六
第七章	薄荷	一一八
第八章	泊芙蘭	一二三
	家庭實習地設計表	一二三
	家庭實習地成績表	一二五
	穀物検査規則拔萃	一二七
	除蟲菊検査規則拔萃	一三〇
	蒟蒻検査規則拔萃	一三三

よりて吸収せられ、新根最も吸収力大なり。根の良否は發育及び收量に大なる關係あり。

莖は中空にして節あり、之を莖節といふ。地上に現れたる莖節數



分蘖模式圖

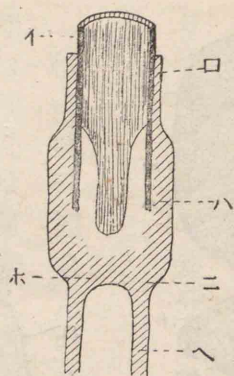
分蘖多少の原因  
内因 品種の特性  
一 挿秧の深淺 二 占所の粗密  
三 光線の多少 四 温度の高低  
五 養分の多少 六 播種の早晚  
外因 七 手入の粗密 八 アオミドロ類及び深水

は普通四個にして、根際に多數集  
合せるものは其の數明かならず、  
節と節との間を節間といひ、節間  
の下端即ち各莖の上部に生長點  
ありて莖の伸長を掌る。種子より  
生ぜる最初の莖を母稈と稱し、母  
稈の下部の莖節より分蘖を生ず。  
莖の太さ、長さは品種によりて異  
るも普通一米内外なり。  
葉は莖節より互生し、細長き平  
行脈にて莖を抱擁し、葉鞘と空間

第一圖  
莖分蘖模式圖

實地につき分蘖の調査をせよ  
分蘖性は概して稈の長さに反比例す

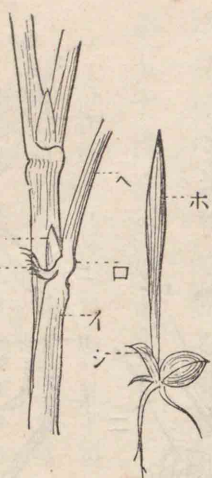
に展開する葉身との二部より成る。葉鞘は莖を環狀に包み兩縁は全く閉合せず、葉鞘の莖に著ける部分を葉節と稱し輪形に膨大す。



然し葉節の内部は横隔膜なければ莖節と區別し得。葉身と葉鞘との境には上圖の如く葉耳と葉舌あり、稻田の雜草たる稗には之を缺くを以て明確に識別し得。葉の長さは普通二五糎、幅約一糎とす。葉

第二圖  
莖縦斷面模式圖

イ、及、ハ、節間  
ロ、葉鞘  
ハ、葉節  
ニ、莖節  
ホ、横隔膜

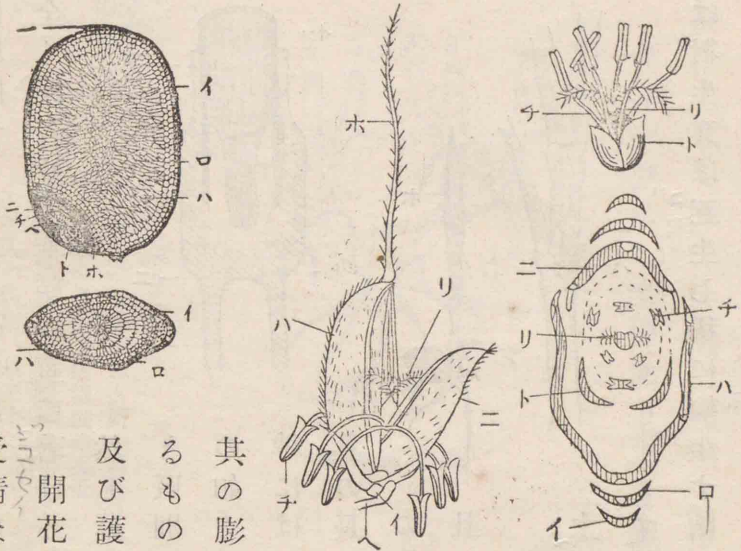


は對生又は互生し、稀に輪生す。鞘部は互生す、枝穂より更に小枝穂分枝し、末端に有柄の小穂著生す、即ち花なり。穂の長さは一八糎乃

第三圖  
葉

シ、子葉  
ホ、本葉  
イ、葉  
ロ、葉  
ハ、葉  
ニ、葉  
ハ、葉  
ニ、葉  
ホ、葉

葉葉葉葉葉葉  
葉葉葉葉葉葉  
葉葉葉葉葉葉  
葉葉葉葉葉葉



第四圖  
稻の花及花式圖  
イ、副護穎  
ロ、護穎  
ハ、外穎  
ニ、内穎  
ホ、花被  
ト、雄蕊  
チ、雌蕊

至二四種、一穂の粒數は百二十三粒を普通とす。  
花は六個の雄蕊と一個の雌蕊を有し、内穎と外穎とに包まれ更に外方に小なる護穎あり。内外兩穎は靱殻にして、外穎は内穎よりも大なるのみならず、其の先端に往々芒を有す。又外穎と子房との間に、鱗被と稱するものあり。鱗被は花被に相當し内外穎及び護穎は芒に相當す。  
開花は穂の上部に始まり多くは白花受精なり。玄米穎實は穎果にして靱殻(穎)

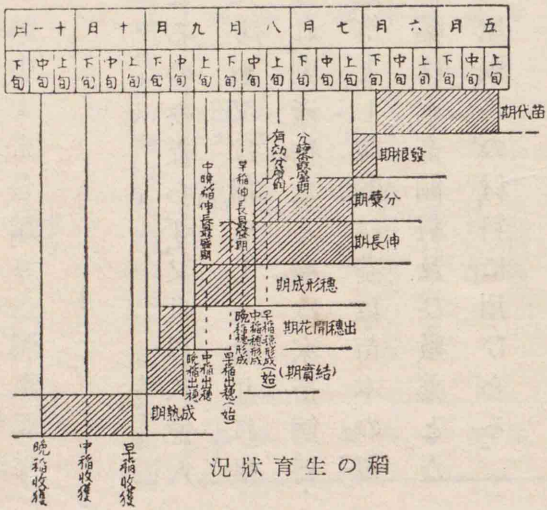
第五圖  
米粒の縦斷面  
イ、皮膜部  
ロ、クレル層部  
ハ、胚乳部  
ニ、澱粉質層部  
ホ、胚收層  
ト、胚收層  
チ、子葉根

にて包まれ、果皮と種皮合して皮部を形成し、其の内部に胚乳あり、一隅には胚存す。胚と胚乳との間に存する吸皮層は靱の發芽に際し効あるものにして、胚はこれによりて胚乳中の養分を吸収し得るなり。

稻の發育期を左の八期となす。各期の期間は氣候、土質、挿秧の時期及び品種によりて異なるも、普通暖地にありては左の如し。

- 一、苗代期 五月上旬―六月下旬
- 二、發根期 六月下旬―七月上旬
- 三、分蘗期 七月上旬―八月中旬
- 分蘗最盛期 七月下旬頃
- 有効分蘗期 八月上旬頃
- 四、伸長期 七月上旬―九月上旬

第一編 普通作物 第一章 稻



稻の生育状況圖

第六圖  
稻の生育状況圖



- 伸長最盛期 八月下旬―九月上旬
- 五、穂形成期 八月中旬―九月上旬
- 六、出穂開花期 八月下旬―九月下旬
- 七、結實期 九月中旬―九月下旬
- 八、成熟期 九月下旬―十月下旬

用途

米は我が國の重要食料品たるのみならず、又世界八億人の生命を保持せしむる重要物産品たり。飯又は餅として食用に供せらるゝ外、製粉・水飴・酒造・麴等とせられ、副産物たる糠は家畜飼料・漬物・肥料・洗料・温床・醸熱材料・脚氣の藥等とし、糠殻は養蠶・苗木の覆蓋、其他果實・根菜類の貯藏用に供し、稻藁は家畜飼料及び敷藁となすの外、繩・蓆・蓑・草履・草鞋等を製し、又屋根葺の材料に用ひらる。

第二節 品種

廣島縣優良品種と其の特性次の如し。(廣島縣農事試験場調査)

品種名	出穂期	成熟期	稈長	稈の強弱	病蟲害の抵抗力	品質	粒形	收量
早生八反草十號	八、八	九、元	中	稍、弱	中	上	大粒中形心白中外白少	稍多
早生喜多穗	八、八	九、五	短	中	強	上	小粒外白無	多
中生廣島錦	八、五	九、二	長	中	強	上の中	中粒外白極少	多
中生旭二號	九、一	九、三	短	中	強	上の中	中粒外白少	多
廣島晚生一號	九、七	九、六	中	稍、強	強	上の中	中粒外白少心白微	多
晚生廣島雄町	九、八	九、八	長	中	中	上の上	大粒外白極少心白多	多
晚生旭三號	九、八	九、九	短	強	強	上の上	中粒外白少	多
晚生藝備錦	九、一〇	九、三	中	強	強	上の上	中粒	多
早生廣島糯	八、二五	九、三	長	稍、弱	強	中の上	中粒	多
晚生旭糯	九、七	九、五	短	強	強	上の上	小粒	多

備考 出穂、成熟期、收量は早生は北部原種圃、中生は中部原種圃、晩生は南部原種圃、其他の事項は本場にて調査

近年品種改良事業大いに進み、良品種中より分離せる純系種又は雜種等を生ずるに至れるを以て、常に農事試験場成績等に鑑み、氣候・土質及び經濟上の事情を考慮し、品種及び種子の交換を地方

オリザニン、糖質、  
アンチペリンは米  
糠を原料とす  
昭和八年作付面積  
及收穫高  
本 三四七〇九・五ヘクタール  
邦 二七、八〇一・五三三CC立  
廣 七三、五九ヘクタール  
縣 二七、七九七・七〇〇立

採種圃に依頼し、最適のものを選ぶに力むべし。

### 第三節 氣候土質

#### 氣候

稻の生育期間は、温度高く日照多く大氣中の濕氣多く、成熟期に至り温度稍低く大氣乾燥せるを可とす。稻作に於ける適温を示せば次の如し。

- 一、苗代期平均一三度
- 二、根張期二二度乃至二八度
- 三、分蘖期二八度乃至二九度
- 四、伸長期二八度乃至三〇度
- 五、開花期二六度乃至二八度(開花適温二七度)

#### 土質

土質は氣候によりて異なるも粘質壤土を可とす。土壤反應は微酸性によく成育す。表土は深きを可とし、殊に多收穫に於いては具備すべき要件の一なり。然れども、寒冷なる地又は下層土に粘土、其他不透性の盤あるときは表土稍淺きを可とす。卑濕地は耕地整理又は排水作業等を行ひ、乾田となすこと肝要なり。

### 第四節 選種浸種

#### 選種

良種子を得るため鹽水又は苦鹽汁（智利硝石硫酸アンモニア）海水等を用ひ、其の中に種子を投入して沈下せる重大なる種子を選び採るべし。之を鹽水選といふ。鹽水選に供する種子は、前年刈取りの際選拔せる穂の中より採り、乾燥清涼にして温度の變化少き所に貯へ置くを可とす。

#### 採種

通風、日當り、排水良好にして肥瘠中庸なる水田に於いて、品種固有の特性を具備し健全に發育をなせる苗を母本とし、收穫の適期に刈取り乾燥採種す。

採種田設置に當り注意すべきは、異品種の接近せざることなり。故に田の周圍を避けて中央より採種し、水田より乾田を可とす。尙ほ穂は中庸大を選び、穂先又は穂の中央にある充實せる種子を選択採種すべし。此の爲には採種田は一本植とし、出穂後、變穗雜穗早



採種田

穂遅穂を除きたるものを刈取るを適當とす。  
選種の比重及び加分量左の如し。

糯種	一〇八	三匁	三三立	三匁	四匁	四匁	二匁
粳有芒種	一二	四匁	一八立	四匁	五匁	四・五匁	四匁
粳無芒種	一・三	五匁	三〇立	五匁	六匁	六・五匁	四匁

一立の重量  
食鹽 六三瓦  
苦鹽汁 二四六瓦  
固形苦鹽 七五瓦  
智利硝石 二八九瓦  
硫酸アンモニヤ 六五瓦  
海水中に食鹽を加へる

比重を計るには比重計を用ふ。比重計なきときは卵を浮べて代用とす。鹽水を數度使用したるときは濃き鹽水を以て補正すべし。選種の順序は比重の重きものより始む。選種終了せば直ちに浸種するときは清水にて洗滌し、尙ほ貯藏を必要とするときは能く洗滌したる後乾燥し置くべし。鹽水選は共同作業とすること最も經濟的なり。

**浸種** 種子は二四%内外の水分を吸収して發芽す。此の水分を吸収せしむるには、平均C十五度の水溫にて六晝夜を要し、水溫に

種子大小と收量關係(十アル當)  
大粒 三・四四一  
中粒 三・三三四  
小粒 三・一八八  
浸種と水分吸收量  
一日 一四・一一%  
二日 二〇・五九%

よりて早晚あり、故に普通は五六日を以て適度とす。浸種には桶浸法、河浸法、池浸法あり。

浸種上注意すべき事項左の如し。

- 一、清水にして常に換水便なること
- 二、種俵は一俵二〇立内外とし、細長く且つ緩く括ること
- 三、水底より上りて底土に接せず、水面より三〇匁の所に日覆を設くること
- 四、浸種中一二回返轉すること
- 五、桶浸しときは日々水を取換へること

**播種期** 四月下旬より五月上旬とす。

**播種量** 蒔床一平方米に對して大粒有芒種〇・六立、中粒並に小粒〇・五立。多收穫には〇・二立内外を可とす。

第五節 苗代

三日 二二・六七  
四日 二三・三八  
五日 二四・〇五  
六日 二四・〇三  
七日 二三・八七

苗代地の選定

苗代は古來、田作の半毛又は苗代作り七分、田作り三分といひ、米作の根源なれば最善の注意をなして健苗を育成するを要す。苗代地の位地につきては左の事項に注意すべし。

- 一、灌溉排水に便にして用水可良なる所
- 二、管理に便なる所
- 三、日當り日光の透過可良なる所
- 四、路傍の通行頻繁なる所及び人家大樹を避く
- 五、深田冷田、金氣田冷水湧出田汚水流入田に非ざること
- 六、肥瘠中庸の砂質壤土より成る乾田なること
- 七、螟蟲多き所を避くること

苗代の整地

苗代には水苗代普通苗代、陸苗代畑苗代、折衷苗代ありて各特質あり。その地に最適の方法を選定すべきなり。現今最も多く行はるゝは水苗代なり。

水苗代は耕起深きよりも浅きを可とし、稻刈取り後株切りを行

努力の節減、種類の統一、害蟲驅除、除草管理上の便を計る爲に共同苗代あり、又集合苗代あり

陸苗代は管理上便なり、灌溉水少き所にて殊に然り

ひ、粘土質は秋期、砂地は春期淺耕乾燥せしめ、秋耕せしものは三月再び切り返しを行ひ、更に播種二週間前頃に至り丁寧に鋤返し、土塊を碎き畦塗をなし、代掻きして田面を均し、土の鎮定後排水し幅一二〇糎長さ適當の短冊形に區劃し、播種に備ふべし。泥輕き所にありては一兩日間日干して水を久れ下種に著手すべし。

苗代灌溉には暖水を可とするを以て、水溜若くは水路をなるべく長く施設するを可とす。

從來苗代整地は壁土の如く練る地方あるも、こは苗の發育を不良ならしむるを以て、乾燥中土塊を碎きて短冊形として、水を入れたる後あまり練らざるを可とす。強粘土腐植質土のときは川砂を撒布して一二日間日干後下種するを可とす。

苗代肥料

肥料は人糞尿、硫酸アンモニヤ及び過磷酸石灰、草木灰等とし、大豆粕、油粕類、魚肥等は特に細粉し、大豆粕の如きは特に豫め醱酵せしめ置くを要す。適量は土地によりて異なるも、移植に際

簡易苗代として耕起をせず畦溝の土を床に上げて播種するもあり  
近來米作法に何式と主張され行はるるもの數々あるもその特質は多くは苗代にあるのみ研究を要す

苗代期間四十日乃至五十日

し施肥の全部吸収利用せられ、濃綠色より稍、黄綠色に變じて硬化するの程度をよしとす。

苗代一平方米に對する施肥量 (廣島縣農事試驗場)

棉實	粕	一七〇・四瓦	元肥	床面に撒布し土壤をよく攪拌す
過磷酸石灰		一三三瓦	元肥	同上
木灰		一二五瓦	追肥	苗三糶位成長したるとき

苗代肥料は元肥を主とし、特別の事情なき限り追肥を用ひざるを可とす。

播種法

短冊形一〇八糶に正しくなるやう左右三糶づゝを明けて播種す。苗三糶餘に達し床面充分に締りたる後に鎌にて削り落す。床面出來上りたるとき先づ元肥を施し、表土と混和し丁寧に均し、翌日播下し、鋤にて種子を壓し、種子の軽く土に押しつけらるるを度とし後灌水す。

播種後の管理

下種後一週間、溫暖平穩なる日、毎朝落水し乾燥

肥料一立目方	
人糞尿	一〇〇〇瓦
過磷酸石灰	八三三瓦
木灰	一〇六瓦
	三六瓦

苗代成育調査  
 第一回發芽當時  
 一、發芽時期  
 1. 發芽  
 二、發芽の良否

程度を見計ひ四乃至七時間田面を日光に當て、發芽を促進すると同時に、幼芽の健全なる發育をなさしむることに注意し、苗の三糶餘に達せし後は常に水を淺く灌水し、時々晴天溫暖なる日に灌水を排除して苗を強健ならしむるに力む。

五月二十日以後は採卵捕蛾を行ひ、夜間は誘蛾燈を點ず。浮塵子發生蔓延の虞あるときは、一〇アール、二立位にて石油驅除を行ふ。

第六節 本田

本田整地

前作物收穫後直ちに耕鋤し、深さは常に底土五分位を耕起するを標準とし、犁は深耕に適するものを用ひ、地味の齊一を計るため一樣に耕起するやう力むべし。その後塊返しを行ひ、土塊を碎き水を灌ぎ畦塗を行ひ、挿秧前代鋤、代搔を行ひ、柄振にて丁寧に地均しを了へ挿秧す。

本田肥料

施肥をなすには、先づ幾何の窒素、磷酸、加里を施すべ

深耕の利害	
耕鋤	收量、熟期
三糶	比較、十月
六糶	一〇〇
九糶	一〇五
一二糶	一一三
一五糶	一二三
一八糶	一三〇
二四糶	一四三
三〇糶	一四〇

深耕は藥量及び稈長を増すも熟期遅るゝ傾あり

きかを定めざるべからず。此の三要素の定め方は次の如し。

例へば、玄米一八〇立の生産とせば、この玄米及び粃殻、糞、其他の附帶物の含有する三要素量を見ざるべからず。

農林省農事試験場に於ける吉川博士の調査に依れば、

玄米	一四二・五瓩	窒素	三・七瓩
一八〇立に付	粗穀	三七・五瓩	この含有成分
糞	二六二・五瓩	加里	二・六二五瓩
		磷酸	一・二二五瓩

故に五四〇立の生産のとき  
は此の三倍を含有する理なり

然し、右の三要素は施肥によりてのみ供給せられしものに非ず、天然に供給せられし量も亦少からず。即ち前作肥料の残量、風化分解によりて不可給態養分の可給態となりしもの、又灌漑水に含有する肥料分、雨水によりてアンモニヤ等空中より降下する量等相當にあるものなり。此の天然供給量は場所によりて大差あること勿論なれども、今調査の一例を示せば次の如し。

窒素	東京本場	畿内支場	四國支場
加里	四七六六瓩	五三三六瓩	二六一四瓩

磷酸	三〇〇〇瓩	四七六六瓩	二二〇六瓩
加里	三五五五瓩	五八一六瓩	四九四三瓩

尙ほ肥料は、施肥の成分全部が土壤に吸収せられ、作物に利用せらるゝものに非ざること考究すべきことなり。その吸収せらるる割合は肥料毎に異なるものなれども、種類による平均量は次の如し。

窒素	五七%	即ちこの結果例へば磷酸肥料は吸収率二〇%なるを以て實際施肥には五倍量を用ひざるべからざるなり
磷酸	二〇%	
加里	五〇%	

故に施用すべき三要素量は次式によりて定まる理なり。

$$\text{施用三要素量} = \frac{\text{土地より擷取する養分量} - \text{天然供給量}}{\text{吸収率}}$$

然し各肥料は土地によりて養分流失量も異なることなれば、實際問題としては三要素量の適當を定むること困難なり。故に各地の状況に應じ實地試験によりて三要素量を定め、最小養分率に應ず

稻の平均吸収量  
(十アール當  
一〇〇立に付)

窒素	三・四瓩
磷酸	〇・六瓩
加里	三・〇瓩
曹達	六・三瓩
石灰	三・六瓩
苦土	三・六瓩
硫酸	五・三瓩

るを最も可とす。

### 肥料の選擇

三要素以外に、有機質及び石灰の二種も亦必要缺くべからず。近來は肥料の四要素或は五要素とも稱へらる。

稲作の肥料は種類甚だ多く、新しき肥料も近來續出すれども、主なるものは綠肥・木葉肥・厩肥・人糞尿・魚肥類・油粕類・大豆粕・醬油粕・燒酎粕・過磷酸石灰・硫酸アンモニヤ・米糠・鷄糞・蠶糞・草木灰・硫酸加里等なり。石灰濫用は土質・米質を惡變す、注意すべきことなり。

施用肥料選擇上の注意事項次の如し。

- 一、販賣肥料は肥効大にして成分の割合に市價低廉なるものなること
- 二、土質によりて肥料を選擇すること
- 三、土壤反應によりて肥料を選擇すること

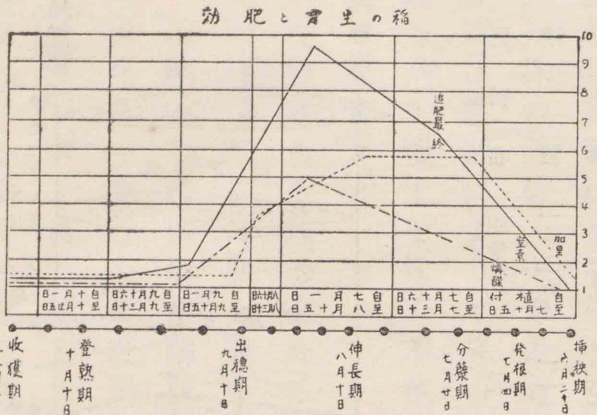
### 肥料配合

稲作生育期間に要する肥料の分量は各異り、一種の肥料にしてよく要求を満す三要素の割合を適當に含有するものは極めて少し。故に施肥に當り必要量とする或る成分に過不足な

からしめん爲には、必ず各種肥料を配合し、以て三要素を適當に含有せしめざるべからず。

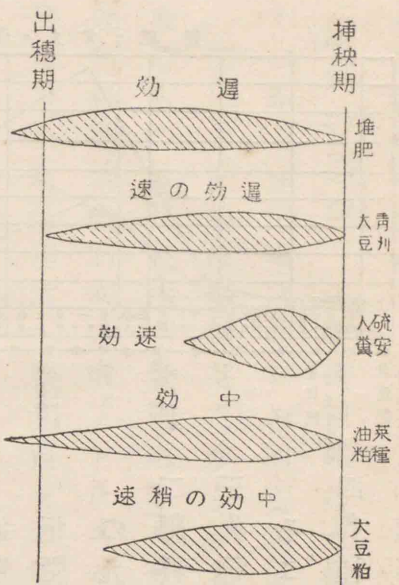
### 配合肥料上注意すべき事項

- 一、施用せんとする肥料三要素の適量は、氣候・土質・收穫量・肥効率・施肥量等によりて異り論ずる能はざるも、普通窒素一・二五珎以内とし、厩肥・綠肥肥料主體なるときは、磷酸は窒素の九割、加里は磷酸の九割を配合す。
- 二、肥料の肥効の遲速を考慮すること。
- 三、異種肥料の配合は其の可否を考慮すること。
- 四、各種肥料の反應及び配合肥料の反應が作物發育に適當なりや否や。



各村農會中肥料配合をなす所から利用すべし

第七圖 稻の生育と肥効



**施肥量及び時期** 施肥量は氣候、土質、土地の肥瘠並に深淺、品種、肥料の種類、栽培法及び收量等諸種の複雑なる事情によりて異なるも、廣島縣農事試験場の施肥量の一例は次の如し。

肥料名	總量(疋)	元肥	追肥	含有成分(瓦)		
				窒素	磷酸	加里
堆肥	一二二五	—	—	五六二五	二九二五	七〇八七・五
大豆粕	七五	三七・五	三七・五	四八七五	七五〇	一一二五
過磷酸石灰	三七・五	—	—	—	五六二五	—
硫酸加里	一五	—	一五	—	—	七二〇〇
計	—	—	—	一〇五〇〇	九三〇〇	一五四二・五

第八圖 肥効遲速の形式圖

**挿秧**

六月上旬より中旬に至る間に行ふを可とす。苗採りは螟蟲卵を附するもの、馬鹿苗病等の病苗及び椽苗を避け稗雜草を除き、丁寧に抜き、根の洗滌をなし、苗束として本田に運搬し、當日植終るを可とす。

一株の苗數、一平方米の株數は土地の肥瘠、氣候、寒暖、移植時期、品種及び熟期によりて異なるも、廣島縣農事試験場にては一平方米に對し早生種十七株五本植、中生種十五株四本植、晚生種十五株三本植となせり。

瘠薄なる土地、寒冷なる土地、移植遅れたるとき、分蘖少き品種、早生種は、一般に株間を狭くし苗數を多くすべし。

移植定規には田植綱、枝定木、三角定木、六角定木等を使用し、水深は淺水にて適當なるを要す。

**灌溉・除草** 苗を植ゑてより四五日は深水として活著を容易ならしむべし。活著後は淺水とし空氣、陽熱を土地に與へ、土水溫を高

水稻直播きは普通播種期より十日乃至十五日遅れて直播きす

株間によりて正方形植、長方形植、三角形植、二條植、四條植

多收穫には一株の苗數を少くし長方形密植を主張せらる



め肥料分解を促し根の發育を計るべし。最も多量の水を要する穂孕期より出穂開花期に於いては六穂前後を保たしむべし。又除草のときは其の都度排水し稲の發育良好にして、穂の稍垂下する頃となれば落水し成熟を促すべし。除草は雑草除去のみならず、中耕作業を併せ行ふものなれば、晴天のとき排水又は淺水にして行ふべし。回数は三乃至五回とし、寒地、早生は少く、暖地、晩生は多くす。廣島縣農事試験場にては次の如く行へり。

- 第一回 六月下旬 雁爪打
- 第二回 七月上旬 雁爪打
- 第三回 七月中旬 手取
- 第四回 七月下旬 手取

近時除草器に種々なるものあり、各其の土地に適當なるものを選択使用すること肝要なり。尙ほ除草に際しては常に補植並に害蟲驅除に注意すべきなり。現今畜力器を採用せるあり、初期の除草に於いて効程大なり。

**浸水手當**

浸水の被害最も大なるは出穂前にして分蘗期穂孕期之に次ぐ。但し後二

者は事實上被害は少きものなり。濁水暖水は常に被害多し。被害を受けしときは次の方法によるべし。

- 一 稻田を淺水にし莖葉を洗滌し發育を圖ること
- 二 稲苗腐敗するも根に尙ほ活力あるときは上部を切りて復活を促すこと
- 三 稲苗全滅が土用前のときは他田の株分をなし移植すべし
- 四 七月上旬頃に全滅のときは株分法又は直播法を行ふべし
- 五 浸水地を有するときは豫備苗を設置すべし
- 六 浸水せざる地に挿苗を用意すべし

**早害手當**

- 一 挿秧期に用水無きときは、用水ある稻田に大株に挿秧又は挿苗し置き、用水ありて後株分又は間引きて移植すること
- 二 前述の作業困難なるときは苗代に薄蒔として据置くこと
- 三 枯渴せるときは一時に灌水せず漸次に行ふを可とす
- 四 莖葉枯死せる部分あるときは其の部を刈取り灌水すること
- 五 早魃の中途に少量の灌水は却つて害あり

**第七節 收穫調製**

- 本田生育調査
- 第一回 大暑
- 草丈 一株莖數
- 第二回 二百十日
- 草丈 一株莖數
- 第三回 秋分
- 草丈 一株莖數
- (以上何れも五株平均にて)
- 第四回 出穂當時
- 出穂期(三分通)
- 穗揃期(大部分)
- 第五回 成熟當時
- 成熟期(黃熟)
- 稈長(根元穗首間程の剛柔)
- 第六回 收穫當時
- 收穫重量(米、粃、藥量)
- 粃摺歩合、層米、粃

年々浸水する地方は早植として充分株張りをなさしむときはたとへ莖葉枯死するとも新芽の發生早き利あり土用後に全滅のときは稻作不能なり他に利用の途を計るべし

早害地は溜池完成を得策とす

收穫

收穫の適期は成熟せしときなるも、熟度は次の如く分つ。

一、乳熟期(青熟) 穀實綠色にして濃厚なる乳汁を呈する時

二、黄熟期(糊熟) 穀實黄色になり堅實し、稈葉亦黄色を呈する時

三、完熟(全熟) 穀實全く堅實となり、稈葉中の水分多くは散逸し

乾燥せる時

四、老熟(枯熟、過熟、死熟) 穀實光澤を失ひ、稈葉亦枯死せる時

右の熟度は普通一週間内外にして、次期に漸次移行するものなり。莖葉より養分を種子に移行するは、黄熟期に於いて停止するを以て、此の期即ち穂及び穂首黄變したる頃(青米の混ぜざる程度)に於いて早刈を可とす。刈取後も尙ほ成熟作用持續するものにして、これを後熟又は追熟といふ。

刈取後の乾燥法には、平乾、立乾、架乾の三種あり、それ〴〵長短あるも先づ架乾を可とせん。

架乾上注意すべきこと次の如し。

一、通風良きこと

二、小束とすること

三、密に掛けぬこと

四、取入は晴天三四日乃至一週間後

調製

脱穀は稻扱又は脱穀機による。近時動力に依る精巧なる脱穀機多く使用せられ、容易に脱穀し得るやう進歩せり。

脱落せし粃は蓆上に擴げて乾燥し、時々攪拌して容易に脱稈し得るまで乾燥すべし。若し乾燥不充分なるときは、碎米、傷米、胴割米等を生じ、従つて精白に際し精白歩合不良なるのみならず、貯藏中も害蟲發生し易く變質し易し。

近來火力乾燥大いに奨励せられ、乾燥室又は三林式火力乾燥機等普及しつゝあるは、從來此の點に著しく缺陷ありしと、産米調製上乾燥の甚だ重要な作業たるに依る。

乾燥を了したる粃は粃摺臼に入れて粃摺を行ひ、稈(粃殼)と玄米

とを分ち、籾は再び籾摺臼にて籾摺を行ひ、前同様にして遂に玄米とす。之を颯扇にかけ精製して玄米のみとす。  
 籾より玄米を得る歩合を籾摺歩合といひ、普通五〇%内外、重量にて八〇%内外なり。

### 第八節 俵装

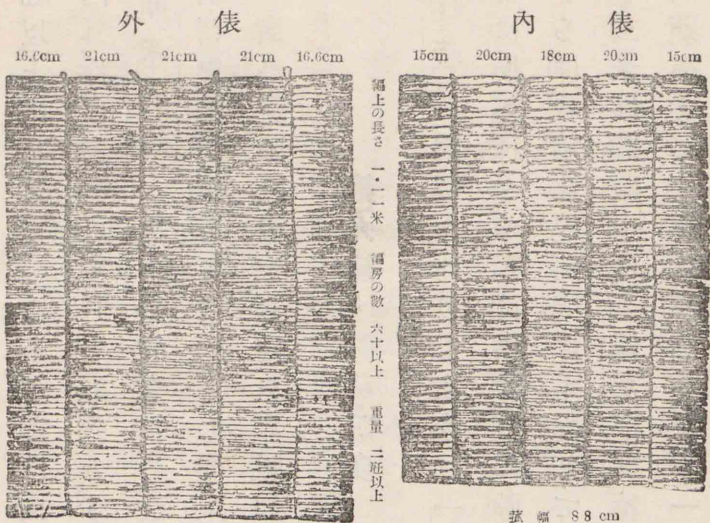
#### 俵装

精製したる玄米は俵、其他のものに入れて運搬貯藏に便ならしむ。俵は二重俵とし、内俵は古藁、外俵は新藁の乾燥せるものにて製す。内俵に古藁を用ふるは米の乾燥維持の爲にて、外俵に新藁を用ふるは外觀の美を保たせん爲なり。

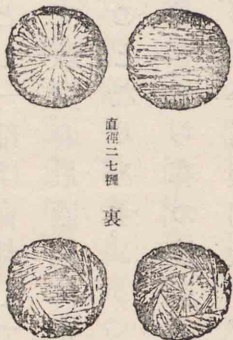
廣島縣米穀俵装規定を参照知悉すべし。

#### 収量

玄米収量は各土地によりて異り大差あるも、概畧三六〇立乃至四五〇立を普通とし、四五〇立以上を上作とす。近時多收穫栽培法唱導せられ一四四〇立以上の新記録をも生ぜり。



#### 俵装表

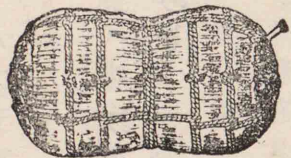


直径二七厘米

#### 仕立方



樽 五ヶ所掛  
縦 四方掛  
俵の體長三七二  
厘米乃至四六厘米を  
適當とす



第九圖  
第十圖  
第十一圖  
第十二圖  
俵の仕立方  
(俵装方法)  
廣島縣令第十四  
號昭和七年三月  
三十一日米穀檢  
査規則第十二條  
參照

玄米一八〇立の重量は普通一四二・五疋内外なれど、稀に一五〇疋以上に及ぶものもあり、藁は玄米一八〇立に付平均二六二・五疋内外、稈は三〇疋内外を通例とす。

産米改良

米の増収、米質の改良を計り、調製、俵装を整へ、農家の福利を増進するを目的として、米穀検査を行はれつゝあり。

廣島縣穀物検査規定を参照知悉すべし。

第九節 貯藏・販賣

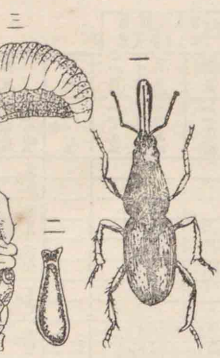
貯藏

調製を終りし玄米は一部は飯用とし、一部は賣却して貨幣に換へ種々の用に供す。故に貯藏し置きて販賣の最適期に賣却するは、栽培法の研究にも増して必要なることなりとす。

玄米は貯藏中に米質及び容積を増減し易し。即ち春の彼岸後入梅期節までは榊目増加し、冬季一二月頃及び夏土用後初秋までは減量するを普通とす。貯藏中の増量は米の吸濕性に依り、減損は貯

米の貯藏に保米袋あり

藏中の酸化作用に依り、炭酸瓦斯の發生又は揮發性油分の發散による。これらの變化は濕氣、大氣、日光等によるものにして、甚しきときは腐敗さへなすことあり。光線は色澤を不良にし、價格の低下を招く。故に米穀の貯藏は先づ俵装を充分廣島縣穀物検査規定の主旨に合致するやうにし、乾燥、低溫を保持し、日光を完全に防ぐ所になすべきなり。

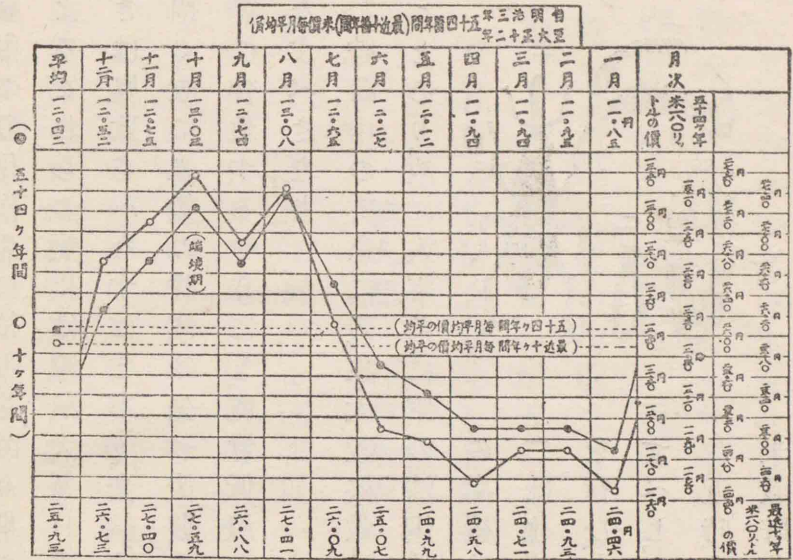


貯藏中の害蟲に穀象、大穀盜、穀蛾等種々ある外、鼠害さへ受くることあり。故に入庫前に庫の清潔法を行ふ外に、入庫後も害蟲發生

の處置法として、クロールピクリン又は二硫化炭素、硫黄燻蒸法等によりて驅除を行ひ、其の時期を失せざるやうに注意すべし。

近時農業倉庫等各地に設けられ、一は米穀貯藏に便し、一は農家の金融に資せ

第十三圖  
こくそう  
一、成蟲  
二、卵  
三、幼蟲  
四、蛹



られ、其の效果甚だ大なり。宜しく農民は此の種日新の知識と機關の活用利用を計るべきなり。

**販賣**

米價は年に依り時期に依りて變動し、其の原因亦甚だ複雑なるも、主なる原因と考へらるゝものは次の如し。

- 一、作柄の豊凶
- 二、人口増加と産米
- 三、貨幣の多寡及び品位
- 四、米の代用品の多寡
- 五、輸入米の多寡
- 六、商人の買占及び賣崩

販賣組合共同販賣等を利用すべし

- 七、農家の持久及び投資
- 八、一般經濟界の景況

即ち右の事項と前頁の圖表とを考究して販賣することは、販賣上必要なることなり。

**第十節 補足**

**病蟲害**

稻の病蟲害中最も恐るべきは、稻熱病・葉枯病・萎縮病等にして、害蟲にては螟蟲・浮塵子・椿象・土負蟲等なり。

**收支計算**

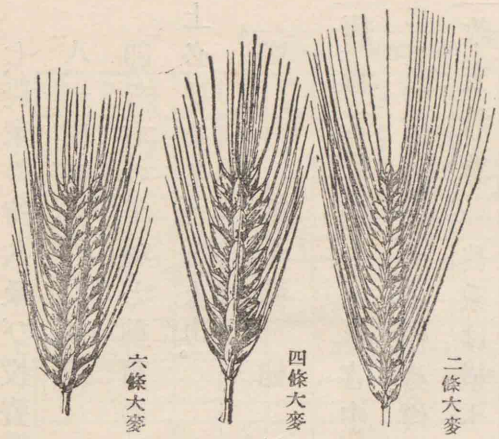
農家は最も密に且つ詳細に稻作に於いて收支を明かにし、以て栽培法の改善を考究し、少費多收穫の實を擧げざるべからず。

**第二章 麥類**

**第一節 大麥**

**性状** 大麥は禾本科に屬し、本邦食用作物中稻に次ぎ重要なものにして、畑に栽培するの外、稻の後作として田地にも栽培せらる。種類に普通大麥(皮麥)と裸麥の二あり。普通大麥は多く關東地方に、裸麥は關西地方並に北海道地方に多く栽培せらる。

廣島縣に於いては概して皮麥は南部地方に、裸麥は北部地方に栽培盛んなり。



**用途** 種實は食料或は飼料とし、又味噌、醬油、麥酒の醸造用に供し、麥稈は帽子、其他種々の細工に用ゆる外、屋根を葺き敷藁となす等効用頗る廣し。

**品種** 大麥も稻と同じく芒の有無成熟の早中晩によりて分類することを得るも、通常は穀粒の條數によりて二條麥・四條麥・六條麥の三種に大別す。

昭和三年度作付  
段別  
邦本  
普通(四〇七三町)  
大麥(七〇六一六町)  
裸麥(五〇九六町)  
廣島縣  
普通(六八二町)  
大麥(一八九七町)  
裸麥(三〇三五町)

第十四圖  
二條大麥

第十五圖  
四條大麥

第十六圖  
六條大麥

廣島縣に於ける獎勵品種特性次の如し。

品種名	項目	出穗期	成熟期	草丈	五〇糶間分藥	穗長	穗型	芒の多短	粒の大小	子實内容	品質	耐病性
裸麥紅梅十號		四月三日	六月一日	〇・九七	九〇	四・五密六條	多長	少長短	大	硝子質	上上	強
同 コビンカタギ		四月六日	六月一〇日	〇・九九	九七	四・五密六條	多長	多長	大	硝子質	上中	強
同 濕氣不知		四月七日	六月一〇日	〇・九九	九七	四・三密六條	多長	多長	中	硝子質	上中	強
同 白珍子		四月七日	六月一〇日	〇・八五	七三	四・三密六條	多中	多中	中	硝子質	上上	強
大麥倍取十一號		四月六日	六月一〇日	〇・二三	五五	四・五密六條	多長	多長	大	硝子質	中上	強

**氣候・土質**

大麥は栽培區域甚だ廣く、熱帶地方より寒帶地方に互り能く各地に於いて栽培せらる。されど氣候溫暖に過ぎ降雨又多き所に於いては莖葉徒長し易く、従つて成熟不完全なるを免れず。特に抽穗後雨多きは成育を妨ぐることに大にして最も有害なり。本邦内地産の大麥は品質概して粗惡にして、其の歐米産に劣る所以は、蓋し氣候溫暖にして多濕なるによる。寒冷多濕なるは、溫度低きに失して害更に大なり。即ち大麥は乾燥にして溫和なる氣候に

適するものといふべし。

大麥の生育に適する温度は、全生育期間を通じて攝氏十六度、成長期には十五度、成熟期には十七八度を最も適當とす。

大麥は各種の土壤に於いて栽培し得るも、砂壤土又は壤土にして、下層排水に便なる土質を最も適當とす。

廣島縣の風土は裸麥よりも大麥の栽培に適す。麥作狀況よりいふも裸麥に比し大麥の漸次増加の傾向ある所以なり。

### 第二節 小麥

#### 性狀・用途

小麥も亦稻・大麥と等しく禾本科に屬する食用作物なり。歐米にては専らパンに製し、日常の糧食として缺く可からざるを以て其の栽培盛んなるも、我が國にては主として麵類、菓子等の製造に用ひられ、而も之れが原料たる小麥粉の生産は毎年國內需要に不足を來しつゝあり。更に醬油に製造され、麩は蛋白質に富

むを以て家畜の飼料となすによく、麩を製するにも可なり。

小麥の稈は屋根を葺くに用ひられ、速成堆肥とせば良好なる肥料ともなる。

#### 品種

小麥は芒の有無によりて有芒種と無芒種とに分ち、更に子實の色によりて赤小麥と白小麥とに分たる。概して白小麥は品質佳良なるも土質を選ぶこと多く、乾燥溫和の氣候に於いて栽培するに適す。廣島縣の獎勵品種と其の特性次の如し。

品種名	項目	出穂期	成熟期	草丈	五〇種間分蘗	穂長	穂型	芒の多寡	粒の大小	子實内容	品質	耐病性
小麥 島田小麥		五月三日	六月一日	〇・九七米	一〇・六二	九・五七	軍配狀	少短	中	粉狀質中の上	強	強
同 農林四號		五月六日	六月三日	〇・八六	一〇・八九	一〇・三	紡錘狀	中	大	粉狀質上	強	強

#### 氣候・土質

小麥は寒氣に對し大麥より強きも、成育期間長きを以て寒地にては其の成熟を完ふせしめ難し。廣島縣北部山間地方に大麥の栽培盛んなるに比し、南部島嶼部に小麥の栽培盛んなる

昭和八年度  
本邦  
作付 一六〇、〇八・二  
生産 一四、四三〇、〇〇〇立  
廣島縣  
作付 一六、五・七  
生産 一、〇一五、三〇〇立

製粉原料として廣島縣産(殊に南部)小麥は好評なり

所以なり。尙ほ小麥は多雨の氣候に於いて成熟を害せらるゝこと大麥より大なり。

土質は大麥よりも稍粘重なるを良しとす。

### 第三節 選種と麥奴豫防

#### 選種

麥は播種に先ち選種及び麥奴豫防を行ふべし。

選種は稻に於ける如く先づ良穂を選択し、其の種子につき鹽水選を行ふ。

普通大麥	比重一・二乃至一・三の鹽水又は苦鹽汁
選種用液	裸麥 比重一・二の苦鹽汁
小麥	比重一・二乃至一・二二の苦鹽汁

#### 冷水温湯浸法

選種を了せば麥奴豫防のため冷水温湯浸法を行ふ。先づ六七時間冷水に浸し、次に攝氏四十九度許りの温湯に入れ少し温めたる後、攝氏五十四度半の温湯に五分間浸し、水中にて

水一八〇立に付食鹽三・七乃至七・〇を溶解せしむ

黒穂病豫防のみならず斑葉病にも効果あり

冷却し水を切りて直ちに用ふるか又は陰乾とし貯ふるなり。

冷水温湯浸法施行上の注意

- 一、時間と温度を正確にすること
  - 二、施行後の冷却を充分にすること
  - 三、運搬乾燥の際子實の酸酵を防止するやう努むること
  - 四、なるべく共同にて施行し、時間温度をみる人、作業する人等分業的に行ふを便とす
- 尙ほ本法の外に風呂浸法として、自家用風呂を利用して攝氏四十三度許りの温湯に、六乃至十時間浸漬する簡單なる方法行はる。此のときは容器に餘裕を置くこと、釜下に火氣を置かざること等の注意を要し、其の後の手入は前法に同じ。

### 第四節 栽培法

#### 整地

成るべく之を深くすべし。畑地にては平作を行ひ、約四五糎乃至六〇糎毎に鍬幅位の作條を設く。田地にては土質と排水状態によりて適宜の畦を作るを常とす。即ち埴土又は埴壤土にて排



水不良なる地にては畦幅を狭くし、且つ高畦を作りて排水に力め、排水佳良なる砂土又は砂壤土にては、畦幅を廣くし畦土を平にすべく、稀に畦を作るの要なきこともあるなり。田地に畦を作るは排水を圖る爲なり。畦作の爲に生ずる畦溝は麥作に利用せられざる空地なれば、其の面積廣きに從ひ麥作は減收す。されど排水不良なる田地にては、停滯水の爲に麥の成育を阻害せらるゝを以て、畦溝の數を多く且つ其の幅を廣くせざるべからず。

土塊の細碎均等は、畦の形を作り且つ作條を設け得る程度に行ふべし。殊に排水宜しからざる埴土に於いて然りとす。作條は畦幅に應じて設く。即ち畦幅九〇糎位ならば縦に一條、一二〇糎位ならば二條、それ以上は縦又は横に四五糎位毎に之を設くべし。作條を設くるに當りては、挿秧の株間に於けるが如く、麥の健康を害せざる限り一定の面積の地に多くの莖を生ぜしめ、且つ各莖をして平等なる境遇にあらしめ、抽穂期に成るべく空地なきやう地面を利

畑播のときは傾斜の方向に直角に播溝を設くべし  
 (北部積雪多き地方にては上下の方向に附す)

用するに力むべし。

**不整地播**

播種の適期を逸せず、且つ勞力の分配を適當ならしむるため行ふものなれど、同一の地に連年之を行ふときは土地の生産力を減退せしむる虞あり。其の主なる法は穴播・削播・打寄播・打起播等なり。

(一) 穴播法は排水佳良なる田地に於いて、稻の收穫前稻株の間に約一〇糎毎に深さ三糎餘りの穴を穿ち、一穴に十粒位下種する法にて稻の刈取後削り出しを行ひ、基肥を土壤に混じて發芽後條間を耕起して畦作をなす。畦作は十二月中に行ふを可とし、それ以後は出來るだけ早きを良しとす。

(二) 削播法も亦排水よき田地に、稻の收穫後表土を淺く削り作條を設けて條播し、土を混和せる堆肥を以て覆土す。畦作は前者に準ずるものなり。

(三) 打寄播法は排水悪しき田地に作條の位置を定め、播種すべき位

置にある稻株上に、條間の土を打返して載せ、以て小畦を作り、其の上  
上に播種する法にして、其後の手入は前者に準ず。

(四) 打起播法は作條となるべき部分を打起して土塊を細碎し、作條  
を設けて下種する法にして、排水稍、良き地に行ふものなり。

**播種**

播種期は氣候によりて異り、溫暖なる地方にては稍遅く、  
寒冷なる地方にては早くすべきも、北海道地方の如き所にては春  
蒔に非ざれば栽培すること不能なり。播種早きに失せば嚴寒の到  
るまでに徒長して寒害に罹り易く、晩きに失せば根部の滋殖十分  
ならざるに氣温の上昇によりて抽穂を促され、爲に分蘖不良にし  
て收量少く、且つ往々晩出來となりて病害に罹り易し。

廣島縣に於ける播種の適期は、北部にては十月上中旬、中部にて  
は十月下旬乃至十一月上旬、南部にては十一月上中旬とし、小麥は  
大麥よりも稍早播とす。水田の裏作にありては動もすれば播種遅  
れ勝なるを以て、なるべく早蒔するやう心掛くべし。殊に多收穫を

期するとき然りとす。

凡そ整地及び播種の作業は稍粗略なりとも、播種の適期を失せ  
ざること肝要なり。若し播種期の遅れたるときは播種量を稍増加  
し、施肥期を早め、磷酸加里質肥料を潤澤に配合し、播種の面積を廣  
くする等の方法を講ずべし。

播種量は皮麥は小麥裸麥より多くし、氣候寒冷なる地にては然  
らざる地よりも多く、播種期の遅れたる場合、地味悪しきとき、施肥  
少きとき、或は分蘖少き品種又は大粒種を栽培するときの如く、凡  
て分蘖の多きを期待し得られざるときは播種量を多くすべし。

廣島縣に於ける一〇アール當播種量標準

	南部	中部	北部
畑の平播田の廣畦横筋播	七立	七立	九立
皮麥			
田畑一三五種畦二條播	六五立	七立	八立
田九〇種畦一條播	五五立	六五立	七立

畑の平播田の廣畦横筋播	五五立	六五立	七立
裸麥 田畑一三五種畦二條播	四五立	五五立	六五立
田九〇種畦一條播	三五立	四五立	五五立

小麥は裸麥よりも稍薄播とし普通三五立乃至五五立とす。

播種法は腐植土の如く土壤輕鬆にして氣候寒冷なる地方にては、霜柱の害を被るが故に點播すべく、其他の場合には概ね條播すべし。作條の深さは四種位とし、稀釋せる下肥を施したる後播種すべし。作條廣きときは條間の兩側に接して二條をなすやう下種するか、又は播種器を用ふることあり。播種終れば草木灰を施し、次に腐熟堆肥を以て之を覆ひ、硫酸アンモニヤ・過磷酸石灰等を施し薄く覆土すべし。麥は發芽後直ちに多くの養分を吸收するものに非ざれども、下種に際しては硫酸アンモニヤ・下肥等の速効肥料及び腐熟堆肥を施し、然る後なるべく早く草木灰・過磷酸石灰等を施すべし。大豆粕・菜種油粕等を基肥に用ふるときは少量に限るを安全とす。

土壤多濕にて覆土し難きときは混土堆肥を撒布し其上に過磷酸石灰・硫酸等を施し覆土を省くことあり

す。

肥料の種類

稻作施用肥料と大差なきも、稻作に比し寒冷なる時期に栽培し、然も跡作の關係上早熟ならしむるを要するものなれば、概して腐熟せるもの及び速効性の肥料を選択し、成るべく基肥に多く施用するを可とす。窒素に偏せず、磷酸加里肥料をも同量に用ふるときは、熟期を促進し品質を向上せしむるものとす。尙ほ麥作經濟上よりして堆肥・下肥・草木灰・過磷酸石灰の如き肥料を使用するを可とす。

大麥は土壤の酸性に對する抵抗力極めて弱く、寧ろ弱鹽基性土壤に適するも、小麥は酸性に對する抵抗力強し。土壤中の石灰は大麥の吸收量に不足すること稀なれども、之が施用によりて收量を増加すること少からず。

各種肥料に於ける施肥量の一例 (二〇アール當)

地方別 肥料名	追肥		
	一月中旬	二月中下旬	三月上旬
南部			
堆肥	七五〇疋		
人糞尿	七五疋	七五疋	七五疋
大豆粕		五六疋	
硫酸アンモニヤ	七五疋	五六疋	五六疋
過磷酸石灰	一八七疋		
草木灰	三七五疋		
中部			
堆肥	一一二五疋		
人糞尿	七五疋	七五疋	七五疋
智利硝石	七五疋	九四疋	七五疋
過磷酸石灰	一八七五疋		
草木灰	三七五疋		
北部			
堆肥	一五〇〇疋		
人糞尿	七五疋	七五疋	
硫酸アンモニヤ	七五疋	五六疋	五六疋
過磷酸石灰	一八七五疋		
草木灰	三七五疋		

管理

麥の手入として補肥の外に、中耕・土寄・踏壓・土入等あり。中耕は二回乃至三回行ひ、同時に土入をなすべく、畦作の場合には更に溝上げをなすべし。中耕並に土寄は補肥と同時に進行を便とす。

踏壓は輕鬆土にて霜柱の害の著しき所、並に麥の徒長する場合に行ふものにて、霜柱の害を防ぎ且つ分蘖を助くる効あり。土寄・土入と同時に進行なるべく足にて踏む外、松丸太等を以て作條を壓し進むべし。

土入は麥株の内部に土を篩ひ込むものにして、普通の土寄の如く麥の莖を中央に集合せしむることなく、麥株の各莖を持立成長せしむるものなれば、各莖はよく日光を受け株間の空氣透過良好なる故、強剛に發育し倒伏を免るゝの外、雜草防除の利あり。土入は麥の幼弱なるときより數回行ふものにて、深さは凡そ分蘖の本數を標準とし、分蘖三本なれば一糶、四本なれば一・五糶、又穂孕期前行

土入の一例	回数	時期	深さ
第一回	十一月	十二	三・六糶
第二回	一月	六・九糶	
第三回	二月	九	一・五糶
第四回	三月	一・五糶	
第五回	四月	三	三糶

ふ最後の土入は約六種の深さに行ひ、なるべく作條の中央に多く振り込み、麥莖を左右に展開せしむべし。一例を示せば下欄に記すが如し。之を行ふには條間の土を土入器にて作條の上に篩ひ込むものにして、粘土又は濕地ときは焼土を行ふを可とす。

除草は大抵中耕の際之を兼ね行へども、雜草の繁茂甚しきときは特に除草のみを行ふことあり。専ら種子によりて蕃殖する雜草は開花結實せざる間に除去し、宿根のものは根を残さざるやう掘取るべし。

### 第五節 收穫調製

麥の收穫期は品種及び氣候によりて等しからざるも、概して大麥は早刈、小麥は晩刈を可とす。大抵六月上中旬頃なり。收穫の適期は全穂黄熟のときなり。此の期を逸せず刈取り、數日間乾燥し、麥拔にて其の穂を扱ぎ落し、又は麥打臺にて之を打落し、糠糶にて麥粒

廣島縣産麥は兎角乾燥不良の評をうくること多し注意の要あり

を脱離し篩に通し、颯扇にかけてよく調製すべし。

一〇アールの收量は、大麥にて六五〇立乃至七二〇立、裸麥にて四五〇立乃至五四〇立を普通とし、小麥は裸麥に比し二〇立乃至一〇〇立の增收あるものとす。

## 第三章 荳菽類

### 總説

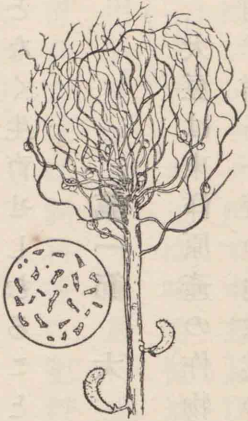
荳菽類とは主として種實を得ん爲に栽培する荳科植物の總稱にして、大豆、小豆、豌豆、蠶豆、豇豆、菜豆、刀豆、鵲豆、落花生等之に屬す。種實は何れも蛋白質、脂肪に富み、滋養分多きを以て、人畜の食糧となし、又種々の工業用に供せらる。成熟したる種實を得るよりも、蔬菜用として嫩莢及び未熟の子實を得る爲に栽培せらるゝものは、其の莖葉にも蛋白質を含むこと多きを以て、家畜の飼料とし、又綠肥

として用ひらる。

荳菽類の根は他の植物と異りて多くの瘤状物を有す、此の中に共生するバクテリアは、能く空氣中の遊離窒素を利用して化合態の窒素に變じ、其の作物に養分を與ふる機能あり。荳菽類と此のバクテリアとは生育上密接なる關係を有し、若し此のバクテリアの全然存在せざるときは、荳菽類は能く成長繁茂せず、又荳菽類なき所にては此のバクテリアは全く繁殖せず。故に荳菽類は此のバクテリアによりて成育を助けられ、此のバクテリアは荳菽類によりて生育する共生生物なりといふべし。

荳菽類は前述の如き作用あるを以て、之が栽培には窒素肥料を施す要なく、主として磷酸加里質の肥料を用ふ。されど全く窒素なき土壤に栽培するとき、其の初期に於いて多くは病狀を呈す。バクテリアの共存するに及べば再び成育盛んになれど、バクテリアの共生せざるものは此のときに於いて枯死することあり。故に荳菽

根瘤菌は荳科植物の異なるに從ひて其の種類を異にす、即ち豌豆に共生するものはツメクサに共生せず、されど土壤中には何れの荳科植物にも共生する中性バクテリアあり、凡そ一の生物が他の生物によりて生活する場合には大抵その寄主を害せざるはなし之を寄生物といふ、根瘤菌は宿主たる作物を害せず却つて之を助け故に寄生といはず共生といふ



第十七圖  
大豆根と根瘤バク  
テリア

類も實際上には其の初期に少量の窒素肥料を施すを良しとす。但し肥沃なる土地又は前作に多量の窒素肥料を施したる場合等には之を要せず。尙ほ其の土壤中に共生バクテリア無きにより發育不良の虞あらば、其のバクテリアを含有する土壤を混ざるを可とす。

酸性土壤にありては石灰を加へて効あり。木灰は加里を多く含む外に磷酸及び石灰分も亦少からざるを以て、荳菽類の栽培には好適の肥料なり。

荳菽類は一般に連作を忌めども、殊に豌豆は著し。荳菽類は普通深根にして土地の下層より養分を吸収し、地表に近く多くの根を生じ、收穫の際には根の大部分は土壤の表層に残留し遂に腐朽す。故に窒素成分を多く要する禾穀類等と輪作せば、施肥量を節減す

新開墾地、瘠薄地、普通作物の不適當地に栽培して有利なることを考究すべし

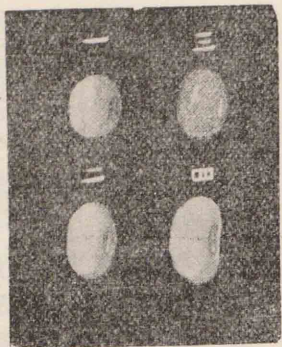
るのみならず、兩作物の病蟲害を減ずるの利あり。  
 荳菽類は一般に忌地性を有し、豌豆は殊に甚し。土壤によりては  
 單に一回の連作にて忽ち忌地病を發生し、三四年も連作せば收穫  
 皆無となることあり。されど稀には四五年乃至十年の久しきに互  
 りて連作し、尙ほ何等の惡結果を生ぜざる土壤も存す。荳菽類の忌  
 地性は有機酸の發生によりて、酸性土壤となる爲に生ずるものに  
 して、此の酸により根は傷められ伸長し難く、地上部の發育も亦不  
 良となるに至るによる。故に此等の土壤に對しては鹽基性のもの  
 を施さば能く其の酸性を中和し、忌地土壤も新土壤と殆ど異なるこ  
 となく生育せしむることを得。

### 第一節 大豆

大豆は東洋原産の作物にして、日本支那交趾支那及び瓜哇、其他  
 南洋諸島一帶の地は其の原産地と認むべく、原種は野生のママ或

大豆を最も多く産するは支那地方にて日本・東印度・瓜哇等順次に次ぐ

はツルマメにて、本邦及び支那にては極めて古くより栽培せり。  
**用途** 大豆は味噌醬油の原料となし、豆腐・納豆・菓子等を造るに  
 用ふ。又油を搾りて食料或は燈料に供し、其の粕は肥料とす。此の外  
 青刈大豆は飼料並に肥料となすに適し、種實も亦飼料に供して効  
 大なり。



### 品種

成長期の長短により早大豆(夏大豆)ともいひ八九十日にて成熟、晩大豆(秋大豆)ともいひ百二三十日にて成熟の二種に分ち、豆の形狀によりて平豆(雁喰豆・碁石豆・鞍掛豆等)、丸豆(赤莢・イタチ・千成・オイラン・長五郎・白大八・輪白・目八月・入道・生娘・黒大豆・青大豆等)に分つ。又粒の大小色澤等によりて種々に細別せらる。

**氣候・土質** 大豆は溫暖なるよりも稍冷涼なる(成長期間攝氏十五度以上の平均溫度を有する)氣候を好むを以て、我が國にては奥

近來米國・獨逸にても多少栽培せらる、我が國の産額三百五六十萬石にて尙ほ滿洲より年々多額の輸入あり

- 第十八圖  
 一、丸大豆  
 二、長大豆  
 三、黒大豆  
 四、枝豆

平大豆は煮食し丸大豆の黃白種は味噌・醬油・豆腐の原料とし黒大豆は煮豆とし綠色種の枝豆は豆粉とするに  
 大粒種は暖地に小粒種は寒地に適す

羽地方・北海道等に良品を産す。又土質は暖地にありては埴壤土、寒地にては壤土若くは砂壤土に適し、一般に肥沃に過ぎたるは結實良好ならず。

**栽培法** 種子とする大豆は、良き母本につき大粒にして能く充實せるものを選ぶべし。

畑は深耕すべからず、耕起も亦精細なるを要せず。乾田及び畦畔を利用して栽培する場合あるも、特に整地するの必要なし。

通常五六月頃、麥條の間に三〇糶内外を隔て、二三粒づゝ點播す。一〇アールの播種量は凡そ五立乃至七立なり。

肥料としては草木灰・過磷酸石灰等にて窒素肥料は殆ど施すの要なけれども、播種の際少量の堆肥・下肥等を施用せば一層良好なり。但し肥沃なる地或は前作に多量の肥料を用ひたるときは、全く無肥料にて栽培することあり。麥の跡を耕耨して土寄

をなすべく、間作せざる場合にも發芽後三四週間を経過せば中耕を行ひ、其の後開花までに三四回の中耕除草及び土寄を行ふべし。又莖葉の繁茂過度なるものは、其の一部を摘心することあり。開花期に旱天續くときは灌水するを可とす。

**病蟲害** 病害には萎黃病・葉澁病・腐敗病あり。害蟲には夜盜蟲・マメシクヒ・マメハンメウ・金龜子等あり。

**收穫・調製** 大豆の收穫は早きに利あり。故に十月頃その葉の黃變し、子實の過半熟するに至れば引き抜き、日光に曝して十分乾燥したる後、槌耨にて子實を打落し篩・颯扇等を用ひて調製し、然る後再び子實をよく乾燥して貯藏すべし。乾燥不充分なるときは貯藏中蟲害を被り、或は醱酵して食用に供する能はざるに至ることあり。一〇アールの收量は一八〇立乃至三六〇立なり。

### 第二節 小豆

大豆及び大豆粕の我が國輸入高  
大豆 八〇〇萬立 (八五〇萬圓)  
大豆粕 三六五萬九千七五担 (三二八萬圓)

廣島縣作付段別  
二八九・三  
生産高 五九六・八立



小豆も亦東洋に汎く栽培せられ、需要多く、我が國の年産額は約六萬疋なり。

**用途** 餡の製造及び赤飯として用ひ、近年は之が粉末を洗粉として用ふるに至れり。支那にては綠豆を以てモヤシを造り、又その粉を以て麵類を製す。

**品種** 色澤には赤色、黒色、紫赤色、淡赤色、肉色、白色及び種々の斑色、草立には蔓性、矮性、葉の形狀に丸葉、柳葉、粒に大小あり。概して大粒且つ淡色なるを尙ぶ。我が國內地にては大納言と稱する品種最も廣く栽培せらる。

**氣候・土質** 小豆は元來暖地を好むも、成長期間短きを以て溫帶地方にても夏季高溫時期を利用して栽培す。北海道地方にてもよく生育し良品を産す。濕氣を要する度合は略、大豆に同じく、土質は壤土及び埴壤土を可とす。

**栽培法**

播種・施肥・手入等は大豆と殆ど異なることなし。一〇アール

の播種量は四―六立にして、收穫調製も大豆に準ずべし。但し小豆は成熟不揃にして子實脱落し易きものなれば、成熟して莢の褐色となりたるものより順次摘採するを可とす。此の手續を省かんとせば、莢の半褐色を呈する頃に抜き取り乾燥して脱粒すべし。  
一〇アールの收量は一八〇立以上を上作とす。

**第三節 豌豆**

豌豆は東西兩洋に汎く栽培せらる。我が國にては、歐洲大戰當時海外輸出激増につれ、之が栽培盛んなりしも、今日は著しく産額減少せり。

**用途** 實豌豆(穀用)と莢豌豆(蔬菜用)の二種あり。前者は主として熟實を煮又は熬りて食用とし、或は味噌・醬油の原料とし、或はグリーンピースとして消費され、後者は莢のまま、若くは單に子實のみを調理して食用に供す。豌豆は又青刈として飼料に供し、或は綠肥

廣島縣 作付段別  
二〇・七セ  
生産高  
二七、八五〇立

廣島縣 作付段別  
三九・三・八  
生産高  
一一、〇七八〇立

となすことあり。

**品種** 豌豆は花に白花紫花の別あり、莢に硬軟の差、草立に蔓性と矮性の別、子實に豊圓なると皺あるものとあり。又白花種の子實には白色なるものと綠色なるものとあり。我が國在來種中白色花を開くものは主に蔬菜用となし、紫花のものは専ら種實用に供す。又一般に軟莢種は蔬菜用に適し、硬莢種は子實採收用に可なり。尙ほ蔓性種は露地栽培によく、矮性種は促成栽培に適す。豌豆の品種中著名なるは雪割豌豆、アラスカ以上矮性、佛國大莢豌豆、臺灣大莢豌豆以上蔓性等なり。

**氣候・土質** 豌豆は寒氣に耐ふる性頗る強く、歐洲にては北緯六十七度に至るまで栽培せり。又熱帶地方にても栽培し得れども、最も適當なるは溫帶地方にて、我が北海道にても成績良好なり。

土壤は乾燥せる砂壤土又は壤土を良しとす。

**栽培法**

豌豆は荳菽類中特に連作を忌むを以て、休閒するか新

地に栽培するかを可とす。

播種は廣島縣内にては普通十月頃、一〇アールの播種量は四乃至六立なり。畦幅、株間は品種に應じ、丈高きものは之を廣くし、低きものは狭くす。一般に畦幅は六〇糎乃至九〇糎にて、株間は二四糎より三〇糎とし、一株に二三粒づゝ點播す。

肥料としては通常堆肥、過磷酸石灰等を用ひ、一〇アールに對し、磷酸三・七疋乃至七・五疋、加里五・六疋乃至九・四疋及び少量の窒素を施用せば可なり。

蔓性のものには支柱を與へ、繁茂の後は手入困難なるを以て、其の以前に於いて二三回中耕、除草を行ふべし。

**收穫・調製** 蔬菜用は軟莢未熟の間に採集し、穀實用は六月頃八部通りの成熟を待ちて、拔取り、成熟は不揃にて下部より順次上部に及ぶものなるを以て、乾燥調製すべし。

穀實の收量は一〇アール當一八〇立内外なり。

### 第四節 蠶豆

蠶豆の栽培區域は豌豆よりも狭く、歐洲にては北緯六十三度を限界とすといふ。これ主として耐寒性弱きによる。

**用途** 種實を煮食し、味噌、醬油等の原料とする外、稻作の綠肥として栽培せらる。歐洲にては大粒を食用に小粒を飼料とせり。

**品種** 山城蠶豆、綠蠶豆、於多福、一寸、在來種等數種あるも、一般に小粒種は種實を得る爲に、大粒種は園藝作物として廣く栽培せらる。

**氣候・土質** 蠶豆は豌豆よりも稍、溫暖なる氣候に適す。即ち溫帶の南部より熱帶地方に亙りて多く栽培せらる。土質は豌豆よりも一層粘重なるを可とし、又濕氣を要すること大なるを以て、水田の裏作として結果一般に良好なり。

#### 栽培法

連作を忌むこと豌豆より少きも、二三年の休閒或は新

地に栽培するを可とす。

畦幅約六〇糎、株間約三〇糎とし、一株に二三粒の種子を下す。一〇アル當播種量は五立乃至九立なり。春蒔、秋蒔の別あるも廣島縣にては普通秋蒔行はれ、十月乃至十一月中旬下種す。發芽に長き日數を要するを以て、數日間浸水し催芽せしめて播種するを可とするも、移植の方法も差支なし。

出雲地方にては秋早く播種し、十一月頃之を刈取りて其の若芽を食用に供し、刈株に發生する莖に結實せしむるの法行はる。發芽後三〇糎位に成長する間に二回位中耕し、稀釋せる人糞尿を補肥として與ふべく、莖の徒長せるときは適當に摘芽すべし。

#### 收穫

蔬菜用に供するものは成熟前に採收するも、種實を目的とするものは完熟を待つべし。一〇アル當收量は二七〇立なり。

廣島縣作付段別  
一三五〇クダール  
生産高  
三二四〇〇〇〇立

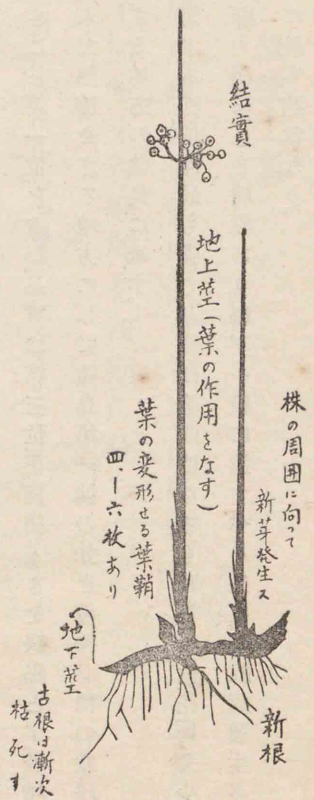
## 第二編 特用作物

### 第一章 蘭草

#### 第一節 性狀現況

**性狀** 蘭草は燈心草科の宿根草にして、根株より叢生狀に分蘖し、細長圓壻形單一なる莖を生じ、葉は退化して根際を包圍せる數片の褐色なる葉鞘となれり。俗にシブ又はハカマと稱す。莖の梢端より一五乃至二〇糎下方に花梗を生じ、總狀花をつけ雄蕊三個あり。蒴内に數多の黄色卵形の小種子を藏す。花梗を生ぜば、其の部に節を生じ質硬化して折れ易し。故に其の發生は能ふ限り防止すべきなり。

**現況** 蘭草は北半球溫帶地方平坦部の多濕地に分布せる植物にして、我が國にては北は北海道より本州・四國・九州の各地を通じ、



第十九圖 蘭草

南は琉球・臺灣又は朝鮮の一部にも栽培せり。支那には一種の支那蘭草ありて盛んに栽培し、花筵敷物用に供せり。近來米國にも多少栽培せらるるといふ。

蘭草の栽培は我が國內に普く及ぶと雖も、殊に盛んなるは岡山・廣島・熊本の三縣にして、福岡・石川・島根・静岡の諸縣之に次ぐ。

壘表は我が國各家庭に之を用ひ、國民の發展と共に今や朝鮮・滿洲・支那・南洋方面にまで需要増加し、花筵は海外輸出品として益發達し、その他帽子・編笠・圓座繩・履物等にも利用せらるゝを以て、蘭草は農家副業材料中に冠たりといふべし。

廣島縣は古來蘭草の主要産地にして、備後壘表の品質、産額は實

栽培面積	收穫高
本邦	六二五〇町二反
廣島	一三、三三六反
縣	三、三五四、二七黃
沼隈	七九九七反
御調	一、九六七、七七黃
郡	三、三三九反
安佐	七四、一〇三黃
郡	一、三五二反
深安	三八〇、七三三黃
郡	八五反
深安	二五、一〇〇黃

に全國に首位を占む。沼隈・御調の二郡は其の主要産地たり。

### 第二節 品種

廣島縣の優良品種と特性は次の如し。

廣島第一號 蘭草粒狀最も優秀にして花梗極めて少く將來廣島縣産特に生産地優

良品の向上に最も適當なるものなり。收量他の品種に比し比較的少きと先枯あるを本品種の缺點とす。栽培上注意を要す。

廣島第二號 蘭草粒狀第一號に次ぎ、花梗稍多きを缺點とするも收量は却つて之に勝る。氣候寒冷なる地方に對し適當なる品種なり。

廣島第三號 收量多きこと第一位を占む。品質は第三位、花梗稍多きを缺點とす。栽培技術の未だ熟達せざる地方にして廣島第一號の如き優秀品種の栽培に適當なる地方の改良に適す。

廣島第四號 病害に對する抵抗性最も強く、品質は第四位なるも收量中位、花梗又少し。伸力彈力稍乏しき缺點あり。縣下一般に適すべく殊に蛇紋病發生多き地方に最も適當なり。

上欄品種の外  
御調郡にては御調  
十五號  
沼隈郡にては在來  
種と稱して栽培せ  
らるゝもの多し

### 第三節 氣候・土質

#### 氣候

一般的に廣島縣の氣候は蘭草栽培に好適せり。左の如き氣候を最も適當とす。即ち生育期間を四期に分ちて、

第一期 十二月乃至二月は寒冷にして根の活著するをよしとす。  
幼年期

第二期 三月乃至四月は温暖にして晴天多くよく根株莖芽の發育を遂げ、分蘖萌芽  
少年期 の素地を作らしむるをよしとす。

第三期 五月乃至六月は温暖にして曇天又は降雨屢あり、新芽の伸長を促すをよし  
青年期 とす。

第四期 七月は温度高く晴天打續き、蘭莖をして充實せしめ、收穫乾燥に際し品質の  
壯年期 向上を促すが如き氣候を適當とす。

風は成長期間中最も忌むところにして、先端を枯し又倒伏せしめ、品質收量を大いに減ず。

#### 土質

耕土深く粘質地にして有機質に富み、灌排水の自由なる

乾田を可とす。一般に浅き砂質地にありては分蘖多けれども質粗剛にして長藳割合少く、深き粘土質にありては分蘖少き観あるもよく伸長し質柔靱、品質良く長藳割合に多し。水湿多く粘重に失する土地は質軟弱に過ぐる傾向あり。

#### 第四節 採種育苗

##### 採種

採種法に種々あるも、一般に行はるゝ方法としては、刈芽苗と稱し收穫期に於いて本田一部分の株を地上約二〇糎の高さに刈り、充分なる保護の下に發芽せしめ、九月下旬施肥し十二月に至りて掘取り、株分して畑地に移植育成す。此他本田の畦畔に所謂畦苗を仕立つる方法あり。

##### 育苗

苗は育成する期間の長短によりて、畑一年苗、畑二年苗、連作苗の別あり。近來八月苗の仕立方多く行はるゝに至れり。八月苗は旱害の患なく、生育旺盛にして本田に於ける成績畑苗に劣らざる利あり。

八月育苗成法は、畑苗を七月下旬より八月中旬までの間に、排水佳良なる乾田の苗代又は藳田跡地を本田の如く整地し植付けを行ふ。苗は新芽の多きものを株分して用ひ、一五乃至一八糎の正條植とす。植付後九月下旬までは灌水し置き、後全く排水し追肥を施し、除草、病蟲害の豫防驅除をなし充實したる苗を育成す。本田一〇アール當約一アールの苗を要す。

##### 八月苗肥料例 (一アール)

基肥	大豆粕	三七五疋	木灰	三七五疋
追肥	油粕	三七疋	硫酸アンモニヤ	〇七疋
	過磷酸石灰	一疋	硫酸加里	三七疋

##### 育苗成上の注意

- 一、日當り通風よく乾濕肥瘠中等以上の地を選ぶこと。
- 二、苗床地は成るべく連作を避け、然らざるものは表土を深く耕し上下反轉すること。
- 三、土質は砂質地又は砂質壤土を可とす。

原苗選擇の條件

- 一、粒狀中等にして質柔靱品種の特徴を具ふること
- 二、生育佳良にして伸長分蘖共に良く花梗少きこと
- 三、強健にして病害の系統に非ざること

上記の方法は比較的少き刈芽苗にて多くの苗を得又古株の少き利あり

##### 廣島縣試験場成績

(收量)

畑一年苗 四七五  
刈芽苗 四二〇  
八月苗 四三三

- 四、苗の植方は濕田植に直挿し、小株に丁寧なことにすること。
- 五、施肥は土地の肥瘠によりて加減すること。
- 六、秋季の追肥は配合法、施肥法、分量等に注意すること。
- 七、病蟲害の防除を怠らざること。

一〇、アール所要の苗床面積は、苗床の地勢、土質、原苗の種別、肥培管理方法の異同による生育状況と、本田の土質、地力如何により、株分の大小、株間の廣狹の差によりて一定し難く、普通一アール乃至一・二アール位とせり。

### 第五節 栽培法

#### 適地選定

耕地狹小にして栽培段別廣大なる所にありては、適地のみを選ぶこと困難なるのみならず、忌む可き連作すら餘儀なく行はざるを得ざれども、努めて風當り少く、深き肥沃の粘質壤土にして、灌排水の便利なる土地を選定し、且つ二三年交代の輪作に

よりて、品質の上進と收量の増加とを期すべきなり。

#### 整地

藺草は濕地に作るとき、跡作として稻を栽培するを以て年中水の絶ゆる暇なく、従つて土地の理學的性質を惡變し、之がため生産物の品質、收量を減損し、病蟲害の誘因ともなるを以て、整地は慎重なる注意を用ひ、稻收穫後藺田となすべき土地は、豫め排水を行ひて土地を深耕し、成るべく風化を充分にし、土塊を破碎し、灌水後地均しを行ひ、基肥を施し、植付をなすべし。

整地の良否が藺草生育に及ぼす影響は次の如し。

- 一、鋤き方淺きときは莖の伸長悪しく且つ倒伏の虞あり。
- 二、地面に高低あるときは、高き所は伸長悪しく低き所は株張悪しく、従つて田面波状を生じて成長す。
- 三、土塊の粉碎粗略なるときは、苗の根著き遅く且つ翌春に至りて雜草大いに蔓延す。

#### 苗の掘取及び苗拵

苗は栽植の前日頃その新芽を損傷せざるやう掘取り、土を振落し、屋内又は日光風の透過せざる場所にて丁寧

に古株を除き、新芽の發生旺盛なる部分を大小不同なく株分を行ひ(十五本乃至二十本を一株とす)七十二株位を一把とし、一アールにつき六十把の割合に準備す。植付までに日數を要する場合は、假植するか又は淺水に浸し置くを要す。若し株根の萎凋する處あるときは稀薄なる尿に浸す。

**植付** 本田の整地を了し株分の準備成らば、苗を約二三糶に剪除し十二月中旬植付を行ふ。土質その他の關係により一定し難きも、株間は一五乃至一八糶、深さ三糶を度とし正條植を可とす。

**灌水排水** 植付後二月頃までは、寒氣のため作土凍結して根を浮上せしむる虞あるを以て、稍深く灌水する必要あり。三四月に入りてより一般に淺水とし、晴天溫暖なる日中は時々落水して根邊に日光及び空氣を透過せしむべし。施肥中は地面を潤すを度とし、收穫前は成長を阻止せざる程度に排水し、藎莖を充實せしむると共に田面を乾かし、收穫及び乾燥に便すべし。

**除草** 春季彼岸前後頃より五月上旬頃までに二三回の除草を行ふ。但し藎草は其の株間極めて狭きを以て、度々田に入るときは藎株を動搖せしめ新芽を損する虞あるにより、成るべく足跡を少からしむるやう注意すべし。

**風垣** 畦畔等の周圍は、日光の強射、風當りのために伸長不充分にして粗剛なるものなれば、五月下旬頃より菰、麥稈、竹簧等にて風垣を繞らし、藎草の伸長を均一ならしめ、又蝗蟲の襲來を防ぐ。

**病蟲害** 藎草は鋸蜂の幼蟲(青蟲)、フタテン、穀蛾等の慘害を被むるを以て、成蟲發生期より屢成蟲、幼蟲の驅除を行ひ、殊に秋季苗床にては注意して其の越冬を防ぐべし。平坦部は蝗の暴害を受くることあるにより、驅除、卵塊採收を嚴に行ふべし。

病害は蛇紋病あり。苗の選擇、施肥等に特に留意すべし。

**肥料** 藎草は最も肥料を多く要する作物にして、栽培の巧拙は施肥の巧拙に關す。故に藎草生育の消長を通觀し、施肥の案配を考



ふべし。十二月上旬に植付け七月中旬刈取らば、其の間二百二十日程なれど、植付當時より二月末まで八十餘日は休養にして、三月より四月末に至る六十日間は、漸次温度の上昇に連れ基肥も肥効を呈し、専ら地下莖蔓延し新芽發生の礎地を作り、五月に入りて新芽發生の最盛期に入り、六月に至り新芽の伸長最盛期に移るを以て、藺莖の間斷なき伸長を期すべく、中途肥料の中絶又は缺乏等の現象を一切無からしむべく、七月中旬頃までに肥料分吸収を了りて藺莖の充實を圖らざるべからず。一莖の成長期間は四十五日内外にして、此の期を過ぐるときは先端より枯れ下るものなり。故に各期の生育概況と一莖の成長期間との關係を知り、肥料の種類と分解、肥効期、土質及び天候の關係を會得し、以て肥料の分量、配合法、施用期等を定むべきものとす。

肥料の種類は窒素質肥料として硫酸アンモニヤを主肥とし、これに施肥の當時に安價なる肥料、大豆粕、棉實粕等を配合し、燐酸質肥料としては過燐酸石灰、加里質肥料としては硫酸加里又は鹽化加里を施用すべく、無機質配合肥料の濫用は地力を衰退せしむるを以て、有機質肥料の施用を怠るべからず。

### 第六節 收穫・染土・乾燥

**收穫** 藺莖濃綠色を呈し幾分黃味を帶び光澤ある飴色をなし、藺の先端に稍膨らみのあるときを刈取りの適期とす。普通止肥後四五十日即ち七月十五日前後なり。

刈取りに際し田土柔きときは、刈藺に泥土附著し作業に困難なるを以て豫め排水し置くべし。

刈取りは晴天の未明又は午後三四時頃より、利き鎌にて土際より水平となるやう刈取り、十株位づゝ×形に積みつゝ進行す。別に藺ソグりと稱し、根元より六〇糎内外の所を堅く兩手に握り、屑藺・枯藺・塵芥等を振落し、根元をよく揃へコヒモと稱する繩にて緩く

一〇アール當三要素施肥量  
 窒素 三〇・七五担  
 燐酸 一五・八七担  
 加里 八七・三三担  
 施肥例  
 (千年試驗場)  
 基(堆)肥 七五担  
 肥(大豆粕) 三〇・五担  
 追肥(堆土又は填質壤土)  
 大豆粕 七五担  
 棉實粕 三〇・五担  
 硫酸アンモニヤ 二七担  
 過燐酸石灰 九〇担  
 鹽化加里 三〇・七担  
 追肥(砂土又は砂壤土)  
 大豆粕 一〇七担  
 棉實粕 二六・五担  
 硫酸アンモニヤ 八二・五担  
 過燐酸石灰 六六担  
 鹽化加里 四七・七担

耕土深く生育良好なる土地にては一割又は二割増

分蘖と伸長を基礎とする施肥期			
四月末又は五月上旬	五月中旬	五月下旬	六月上旬
10	20	30	40
20	30	0	50
20	35	45	0

(單位%)

土土  
砂壤粘

束ね置く。斯く束ねたるものを其のまゝ陽乾するときは、藓草の外  
部のみ急激に乾燥し萎縮して色澤乏しく、所謂青白銀色を呈せざ  
るを以て染土を行ひ乾燥すべし。

**染土** 染土の性質は藓の色澤、製品、保存性に關すること頗る大  
なり。有機物及び鐵分の含有量少く、白色にして黒色の土塊及び石  
礫を混ぜざる純粘土を最良とし、帶青白色之に次ぎ、赤色土は劣等  
なり。染土量は一定せざるも、普通一〇アル當五六七五疋乃至七  
五〇疋なり。

染土をなすには、潳水力に富む地盤固き所を擇び、縦二米、幅一米、  
深さ〇・五米の染壺を掘り、又は染土箱を用ひ清水五六荷を満し、染  
土一二〇疋位を入れよく攪拌して充分溶解す。泥水の濃度は甚だ  
大切にして濃厚に過ぐれば一様に染著せざるのみならず、乾燥に  
際し剝脱して光澤を失し、淡きに過ぐれば乾燥藓黒味を帶び優良  
なる青白色を失ふ。適當なる濃度は普通脛毛に泥水の附著するか、

- 廣島縣下優良染土の産地
- 一、沼隈郡千年村
  - 二、沼隈郡山南村
  - 三、雙三郡川地村
  - 四、御調郡原田村
  - 五、沼隈郡藤江村
  - 六、賀茂郡原村
  - 七、深安郡坪生村
  - 八、沼隈郡西村、神村
  - 九、御調郡深田村

手の胛に濃く白色を附著するを度とす。

染壺の濃度適當とならば、刈取りたる藓を二把づゝ之に浸し、染



水の束の内部まで充分浸入を圖り、先端を把持して引上げ、壺の側に $\perp$ 形の柵を構へたるものに直立して寄掛け、餘剰の泥水を滴下せしむ。

**乾燥**

染土を終りし藓草は早朝より路傍、堤塘或は藓刈跡地に藓屑を擴げて繩を並行に引き、其の上にて乾燥す。乾燥中に一、二回上下反轉して一様に乾燥せしめ、午後三時頃陽熱未だ減退せざるとき一疋位をコヒモにて括り、更に一四疋位に結束し舍内に納む。之を生乾といふ。翌日再び取出して根

第二十圖 藓草乾燥

元を倒扇形に擴げ乾燥せしめ、午後三時頃コヒモにて小束とし、更に十把乃至十二把を一束とし根部、中部、上部の三ヶ所を緊縛し舎内に納む。上乾しこれなり。第三日目には根乾しと稱し、積重ねて根元のみ乾燥す。

第七節 貯藏選別

**貯藏** 藺草は濕氣に遭ひ又は直接日光・風等に觸るゝときは變色し易きを以て、地面・壁等に接觸するを避け、成るべく二階等に積み重ね、蓆・菰等にて周圍を包繞し置くべし。

**選別** 貯藏せる藺は取出して其の長短を選別す。藺束の儘直立せしめ米



第二十一圖  
藺の選別

竹を挟み、最も長き藺より順次に抜き去りて各種に區別する内、繩の緩みを生ずるを以て時々縛直しを要す。

選別には多少の差異あれど、大略次の如し。

名稱	長
長引通用	一・三〇三米以上 (四尺三寸以上)
引通及花筵用	一・〇六〇三米以上 (三尺五寸以上)
五八用	〇・九六九六米以上 (三尺二寸以上)
四配用	〇・八七九米以上 (二尺九寸以上)
三配用	〇・八四八米以上 (二尺八寸以上)
二配用	〇・七七七米以上 (二尺五寸以上)
繩座編用	〇・七七七米以下 (二尺五寸以下)

第八節 藺草の跡作

藺草の跡作は稻を植付くるを普通とす。藺草收穫後跡地は耕起することなく、直ちに灌水して長く尖れる俵、或は二〇糶位の尖れ

る木片に、丁字形に柄を附したるものにて適當の距離に穴を穿ち、之に稲苗を挿植す。株間は粗なるよりも密なる方收量多く、稲苗は普通挿秧の際豫め密植し置きしものにて、之を寄苗又は植込苗といふ。夏土用後に於ける稲の挿秧はなるべく早くするを要す。肥料は別に施用するの要なく、藪草の残肥にて充分なり、寧ろ残肥多きため稲熱病を發生すること少からず。爾後一、二回除草をなし、平年作の七八分の收穫を得るを常とす。藪草跡地に適當なる稲の品種は晩稻にて、耐病性强きものを必要とし、旭、小天狗、相徳、藝備、錦等の品種多く栽培せらる。

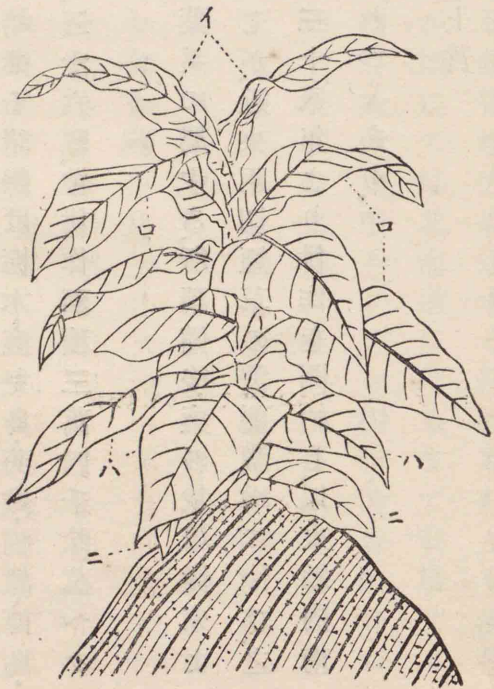
## 第二章 煙草

### 第一節 性狀來歴現況

#### 性狀

煙草は茄科植物、ニコチアナ屬に屬する一年生草本にし

て、通常高さ約二米に達し、單葉互生にして、尖端部に長き漏斗狀の淡紅色の苞を備へ、落花後小圓形の蒴果を結び、其の内部は二室に分れて無數褐色の小種子を含藏す。其の葉にニコチンと稱する物質を含有し、加工して喫味の用に供する外、噛み又は嗅く爲に用ひらる。



第二十二圖  
煙草  
イ、天  
ロ、本  
ハ、中  
ニ、土  
葉葉葉

#### 來歴

煙草は米國の原産にして、始めて歐洲に傳はりしは、西曆一五五八年メキシコ探檢の歸途、醫師の西班牙に携帯せしに依る。次いで佛國に傳はり、又英國に傳へられ、喫煙の風歐洲全土に擴まりしなり。我が國には元龜の末より天正の初め頃、葡萄牙人により

て輸入せられしも、其の栽培は慶長十年長崎に傳へられたる種子に依るものの如し。

現況

煙草栽培の最も盛んなるは米國にして、西印度、玖馬、比律賓群島のマニラも名高く、ブラジル、メキシコ、土耳其等も亦良品を産して名あり。我が國に於ける名産地は大隅の國分、常陸の赤土、相州の秦野等にして、多く栽培せる諸縣は、栃木、鹿兒島、茨城、福島、徳島、廣島、岡山を始め、一道一府三十六縣、總耕作面積三萬四千餘萬ヘクタールに及べり。

廣島縣に於いては、水府葉系に屬する、所謂備後葉の栽培從來より盛んに行はれつゝありしが、近來兩切煙草の需要激増に伴ひ、之が原料たる米國種を明治三十八年より耕作を開始し、以來縣内南部地方に盛んに栽培せられつゝあり。

第二節 氣候・土質

氣候

煙草は熱帯及び亞熱帯地方に適する作物なれども、温帯にても亦栽培可能なり。我が國にては北海道に至るまで栽培せり。熱帯地方に産するものは、内容成分、就中ニコチン、樹脂、芳香體等の充實完全なれども、溫度の降下、濕度の上昇は逐次内容成分を貧弱ならしめ、輕疏なる葉煙草を生産せしむ。成長期間適度の降雨あるは甚だ肝要にして、乾燥に失せば葉中に鹽化物を含有する量増加し、葉質脆弱且つ喫味辛烈となる虞あり。

土質

排水佳良なる土質を好むを以て、砂質を主體とし、之に幾分粘土性を加味するか、又は壤土に礫質を混合せる程度を最も適當とす。腐植質又は粘土に富むときは、收量大なるも葉肉厚く、葉脈太くして品質劣悪なるを常とす。

第三節 栽培法(米國種)

苗床設備

揚床は二米又は三米幅の短冊形となし、煙草一〇ア

葉煙草風乾物

百分中含有量  
主要なるもの%

水分 葉部 二八・〇  
莖部 一八・〇  
窒素 二・四五  
磷酸 〇・六  
加里 四・九  
石灰 五・七

備後葉

四・〇

神石

蘆品

甲奴

比婆

世羅

米國種 一・六〇

沼隈

深安

豊田

賀茂

御調

安藝

佐伯

一ル耕作に對し蒔坪○一五アールを二月中旬に設備し、一米毎に地上四五糎高さの杭を打ち込み、上下三段に青竹を結び付け、之に藁を編み付けて框となし、其の内に落葉松葉藁稈の類を敷込み鎮壓して表面を稍中高の蒲鉾形となし、其の上に新鮮厩肥を盛入れ、更に鎮壓し釀熱物とす。其の上部に薄く厩肥の見えぬ程度に敷藁を置き、山徑の排水良好なる霜崩れ土壤を平均に置き置土となす。更に其の上に表土を置く。表土は苗床設備一ヶ月前に油粕を混じ、充分醗酵腐熟せしめ置くべし。

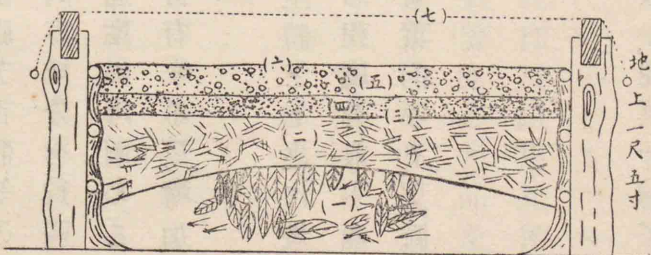
播種育苗

設備終れば當日又は翌日播種す。播種量は一〇アール當一瓦にして之を堆肥の細粉

約一・四立に混じ、一寸七分目點播器を用ひて播種す。播種終れば坪五・四立の割合

堆肥	一二六立
菜種油粕	四・五立
土原野土壤	五・四立

(五)表



第二十三圖  
揚床の構造  
(一坪當)  
(一)落葉三、四十貫  
六寸厚さ  
(二)厩肥四十五貫  
三寸厚さ  
(三)敷藁  
(四)置土八斗  
一寸五分厚さ  
(五)表土  
(六)播種蓋肥  
(七)苗育布

にて細堆肥を撒布し、一列に敷藁し、細目如露にて第一回目の灌水をなし、框に針

(一坪當) 粗穀燻炭	二七立
藥灰	五・四立

金を張り苗育布を張りて床面を被護す。尙ほ夜間は菰覆ひをなすべし。大雨の場合は雨除け設備をなし床面への流入を防ぐべし。

管理

發芽前晴天の場合は一、二、三回灌水し、灌水不足に陥らざること肝要なり。普通二週間内外にて發芽す。發芽後は幾分灌水を減じ、間引をなし、苗の強壯齊一を期すべく、第一回は二、三葉開舒せるとき四、五本残し、第二回は四、五葉開舒せるとき三本立とし、第三回は五、六葉開舒せるとき二本立とし、第四回は七、八葉開舒せるとき一本立とす。間引の都度追肥を施し、三番間引後第一回中耕を竹箸二本を以てし、四番間引後第二回目中耕をなす。尙ほ第二回目中耕の頃より溫暖なる日には朝夕育布を張り上げ、順次長くし、移植一週間前より終日撤去し、日光に照射せしめ、苗の強壯を計るべし。播種後普通六十日位にして移植適苗に達す。

追肥用油粕は中途醗酵最も悪し

定肥	細堆肥五、四立申箱 三、六立を混合醱酵 せるもの	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回
(一坪當)	灰	一〇八立	一〇七立	一〇八立	一〇八立	一〇八立	一〇八立

**移植** 移植適期は四月下旬を最も良しとし、移植前夕苗床面に充分灌水し、當日早朝苗抜きし日蔭場所に安置し、午後太陽の傾きし頃より植付くべし。尙ほ移植は雨後を避け、晴天續きて土壤の乾燥したるときを選び、畦間一米株間〇・五米に植付くるを以て普通とす。

**肥料** 煙草の内容成分を分析するときは多數成分あれども、其の多くは土壤内に含有せられ、特に施肥の要あるものは普通作物と同様に窒素・燐酸・加里なりとす。

肥料は煙草の形體を養ひ、且つ之れにより收量の多寡及び品質の善惡を生ずるものなれば、其の選擇及び施用法に對する注意を要す。惡質肥料(大豆粕・魚肥・硫酸・安智利硝石・人糞尿の類)施用の場合

- (一) 莖丈三種乃至四、五種
- (二) 著葉數十二、三枚(甲折葉共)
- (三) 鬚根多く一段歩植付本數二千四百本

本圃一段歩當  
標準肥料  
總量 基肥 追肥  
油粕 五、三五、一五  
過燐酸 八、八、一  
石灰 四、三、三  
木灰 三、三、一  
硫酸 三、三、一  
加里 三、三、一  
堆肥 三〇〇、三〇、七  
油粕基肥の内十五貫は腐熟せしめ施用す

煙草は成熟遅れ、裏拔不良にして惡臭を有する劣惡品となるに反し、菜種油粕を施用すれば葉肉緊り彈力に富み、且つ色澤良好なる優良品を生産し得らる。次に加里肥料たる草木灰・硫酸加里は煙草に取り非常に大切なる肥料なるが故に、不足なきやう充分に施す必要あり。煙草を一名加里植物といふも足らざることなし。

施肥量の一例下記如く、之れを粘質土壤には基肥七割、追肥三割、砂質土壤には基肥六割、追肥四割に分施し、追肥は移植二週間内外に施用す。

**手入** 土寄は三回に分ち、第一回追肥施用後、第二回移植三週間後、第三回麥刈取後即ち移植三、四週間後行ひ、成るべく晴天續き土地の良く乾燥せるとき蒲鉾形とし、根が二重三重に張るやう行ふべし。摘心は花梗充分抽出し一番咲の蕾の膨らみし頃行ひ、地力・畦株間距離・肥料用量・天候等によりて加減する要あり。摘心後は腋芽數多發生するを以て努めて之を除くべし。

病蟲害

害蟲に螟蛉夜盜蟲根切蟲蛆蠅等。病害に疫病立枯病赤星病白絹病笠葉病舞病等あり。驅除豫防に注意すべし。

第四節 乾燥室

位置

乾燥室を建設する位置は、第一地下水低く高燥なること。第二日照時間多き所。第三自然的防風の設備ありて、空氣の移動過度に多からざる所を選定すべし。

設備

乾燥室は三〇アール乃至三五アール耕作に對し、四坪建一室を建設するを普通とす。

構造

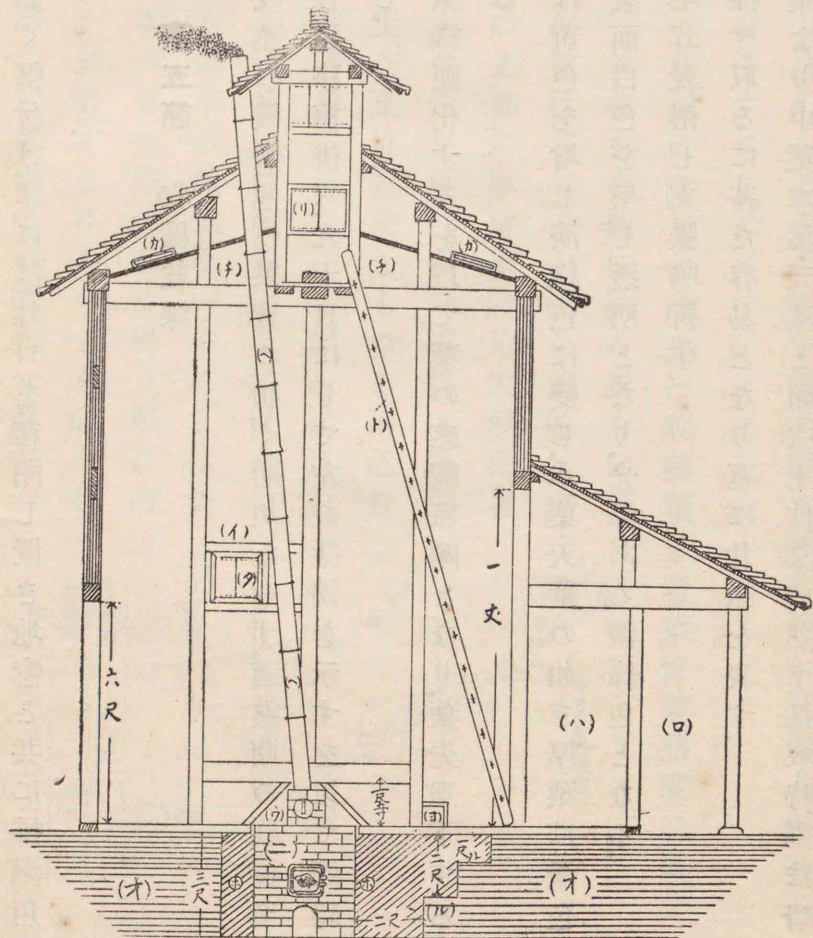
乾燥室は二間四方、十六尺、建壁は五寸の厚壁とし、一尺五寸の勾配を附したる土天井の中央に、一尺八寸内外の排氣窓を設け、屋上更に天窗を設く。吊木は一尺六寸距離とし之を六段とす。最下段は鐵管より六尺位離し置き、窓は寒暖計觀測窓一個、色見窓一個、火用心窓二個、地窓二個を設け、尙ほ出入口一個、底三坪を設備し

備後葉は疫病・螟蛉多し  
米國種は立枯病・笠葉病多し

乾燥室に藥草・瓦葺・亜鉛板葺・杉皮葺あり

室内には鐵管を敷設し、其の上部三尺位の場所に五尺幅の金網を張り火災豫防とす。

焚口の兩横に徑四、五寸の土管を室の中央部に



第二十四圖 乾燥室

- (イ) 室
- (ロ) 出入口外圍
- (ハ) 煙突
- (ニ) 換氣土管
- (ホ) 梯子
- (ト) 土天井
- (チ) 土天井
- (リ) 天窗側面排氣助板戸
- (ヌ) 室間土天渡搗斷面(二尺巾)
- (ル) 焚場への階段
- (オ) 地中
- (カ) 掃除口
- (キ) 土天排氣窓
- (ク) 火用心窓
- (タ) 室内觀測窓



開口する如く掘付け、常には外口を密閉し置き地窓と共に排湿用とす。

### 第五節 收穫・乾燥

#### 收穫

成熟の徴候、他の果實の如く明かならず。適熟期の收穫至難なれど、普通移植後八、九十日にして左の徴候を示すを以て適時收穫すべし。

一、細胞組織硬化するを以て葉の感觸粗剛となり、葉先垂下するに至る。

二、中葉は黄色を増し淡綠色に變じ、本葉・天葉の如き厚葉は濃色失せ裏面白色を呈し透明となり、光澤ある淡綠色となる。

三、葉の毛茸脱落し支脈鳴折す。

四、葉を掻き取るに甚だ容易となり莖に甘味を表す。

下位、土葉より中葉・本葉・天葉と順次上位葉成熟す。採取時刻は晴

天の日朝露の消えんとする時(午前十時まで)を可とし、頂上葉四、五枚は一度に收穫すべし。

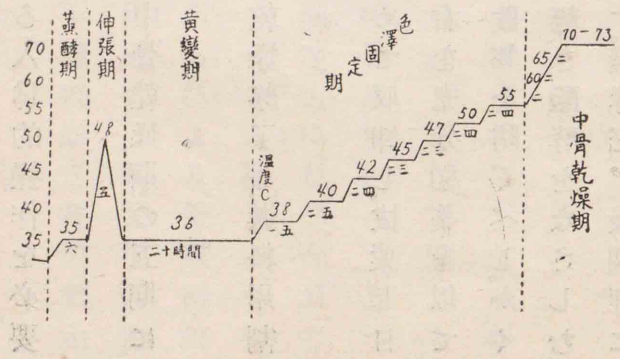
#### 葉編吊込

葉編に際しては、先づ收穫葉を著葉位置、熟度に區分とす。一聯の葉數は百二、三十枚を普通とす。

吊込は室の上部に厚葉・未熟葉大形葉、著葉位置高きものを吊込み、室の下部は薄葉・過熟葉小形葉、著葉位置底きものを吊込むべし。一室當百聯乃至百二、三十聯を吊込む。

#### 乾燥

米葉の乾燥は乾燥室を設け火力を用ひて行ふ。煙草の乾燥といふことは紙切れ又は布切れ等の乾燥とは異り、單に内容水分のみを蒸發するにあらず水、分の蒸發と共に内容成分に幾多の酸化分解の現



第二十五圖

- (一) 蒸酵期  
米國種乾燥溫度表  
終りには葉は柔らか味を覺え程よく温味を感ぜらる
- (二) 伸張終期  
葉に温味をなし柔軟となり天窓絨に觸る感あり
- (三) 黄變終期  
大體葉肉部が七八分方黄色となりたるとき
- (四) 色澤固定終期  
葉肉部は黄色となり葉は半月形となりたるとき
- (五) 中骨乾燥終期  
中骨まで凡て乾燥したるとき

象を起さしむるものなり。故に温湿を調節する人爲的操作を必要とす。

乾燥期を蒸酵期、伸張期、黄變期、色澤固定期、中骨乾燥期の五期に區分す。

一室へ吊込の葉煙草は八、九十時間にして乾燥終了し、燃料用割木四四四疋内外を消費す。

**貯藏**

乾燥終了せば、適度の湿氣を保たしめて取卸し、拔葉し日光及び外氣の直接透過せざる場所に、上下左右を充分稻藁を以て圍ひ貯藏し、空氣と湿氣の侵入を遮り、變色、腐敗等を防ぐべし。かくして二週間に一回位晴天日に積換へをなし、輕き醱酵をなさしむ。

**調理**

貯藏後三週間内外にして醱酵完了す。醱酵完了後調理に著手す。調理は成べく光の變化少き北窓に面し、第一薄葉、厚葉に區分し、而して其の内を色澤、彈力、葉の厚薄、大小等に分ち品位同一なるものを一纏めになし、指定の枚數に把束し、所定の量に包裝し、納

付の手續をなすべし。

**第三章 除蟲菊**

**第一節 性狀用途**

**性狀用途**

除蟲菊は菊科ピレトラム屬の宿根作物にして、我が國にては明治十九年頃和歌山縣下に栽培せられしを以て嚙矢とす。其の後幾多の變遷を経て、明治二十六七年頃廣島縣に入り、先づ御調郡向島地方より順次豊田、賀茂、佐伯の沿海地方に及び、今日の盛況を見るに至れり。その花中に存するピレトロンと稱する不揮發性の酸性樹脂は、蟲類を驅除殺滅するの効あるにより、蚤取、粉蚊取線香及び諸種の農作物害蟲驅除劑として利用せられ、近年需要益、廣まれり。従つて栽培面積も著しく増加し、下欄の如き實勢を示すに至れり。

除蟲菊干物百分中	
含有成分量	
水分	二・五五
有機物	八四・七四
無機物	二・七〇
窒素	〇・九四
磷酸	一七・〇
加里	一・〇
石灰	〇・〇
廣島縣郡別	
作付狀況	
御調 (ヘクター)	三〇〇 四九二 (五)
豊田	三六 三七七 (四)
安藝	八五 九二五 (四)
佐伯	六五 八九三 (八)
沼隈	六 五〇四 (四)

内地に於いて生産額多きは、岡山、廣島、和歌山等の各縣にして、近時北海道及び九州地方に於いても廣く栽培せらるゝに至れり。

### 第二節 品種・氣候・土質

#### 品種

除蟲菊は大別してペルシヤ種(赤花種)、ダルマチャ種(白花種)の二種となす。前者はペルシヤの原産にして葉長大、花亦大にして紅色なり。早生にして強健なるも花數、有効成分共に少し。後者はユーゴスラビヤ國ダルマチャの原産にして、我が國に栽培せるものは此の種なり。葉花共に小にして花の色は白の一種なるも、莖は紅色、淡紅色、緑白色の三種あり。紅色のものは葉小さく草丈短く、一般に粗剛にして花梗強く、花小なるも開花數最も多し。淡紅色のものは其の性前者の如く強からざるも、亦よく中庸を得たるものにして、緑白色のものは莖葉花何れも大なるも花數少し。何れも濕氣を忌むこと甚しけれども有効成分には富めり。

廣島縣に栽培せらるゝものは總て白花種にして、其中早中晩の別あり。目下多數の系統中より淘汰選抜されつゝあるも、現今優良なるものとして奨励せられつゝあるもの次の如し。

	最高莖長	分蘗數	花數	生花總量
高根島除蟲菊(早生)	四〇	四・五	一三・六	六七
重井村除蟲菊(早生)	三三	七・一	一六・〇	八五
高根島除蟲菊(中生)	六	七・二	三・二	二〇
向島西村除蟲菊(中生)	八	三・二	三・二	二〇
同(晩生)	七	八・〇	三・六	三

#### 氣候・土質

除蟲菊は寒氣に耐ふる力大なるも、濕氣の多きを忌む。殊に成育盛んなる春季に降雨多きときは、成育衰へ病株發生し收量大減するを普通とす。

土質は排水佳良なる砂土又は砂壤土に適す。粘質土にありては作倏の方向及び畦作り等により、地表水の排除に努むべし。

## 第三節 栽培法

## 繁殖法

除蟲菊を繁殖するには、播種又は分株の方法による。

播種は普通に行はるゝ方法にして、春秋二季彼岸頃播下す。暖地にては秋播を良しとす。苗床は排水よく肥瘠中庸なる地を選び、一平方米に二、三立の木灰を撒布し、能く耕起したる後幅一米の短冊形に高さ一〇糎位の床を設け、一平方米當〇〇四五立の種子を撒播し、腐熟堆肥、油粕の類を撒布し、薄く覆土し藁稈などを以て被ひ、十一二日を経て發芽せしとき被ひを除く。かくて適宜間引、除草を行へば漸次發育して良苗を得。

苗に床出苗と床替苗との二あり。前者は四、五月乃至六月頃本圃に直ちに定植するものにして、後者は一、二月頃假床を設け五糎の距離に假植し置き九月下旬定植す。床替苗成績良好なれども勞力その他の關係上普通行はれず。

尙ほ三月頃春播して九月定植するもの、及び六月下旬頃その年の新種子を下種し秋定植するものあり。但し後者は成育著しく後れ收量半減するを普通とす。

株分法は一、二年生の古株を三、四本に株分し、老衰部を摘去して少しく深植するものにして、成績は著しく劣悪なり。

凡て苗は無病にして、葉は帶黄綠色、根の充分發育せるものを選び、本圃は普通裸麥の後作とするを以て、作條の上側に沿ひ三〇糎の距離に一本づゝ根を立て、淺植とす。又平坦地にありては幅五〇糎、高さ三〇糎位の畦を作り、其の兩側に植ゑつけ、雨水等の停滯することなきやうすべし。

一般に春植は夏季枯死するもの多く、秋植は活著良好なれども成育後るゝを以て翌年收量減ず。故に春植を主として九月下旬缺株を補植するを良しとす。

## 肥料

施肥は春秋二季に行ふ。秋肥は分蘖を主とし、春肥は分蘖

と開花を目的とするものなるを以て、三要素に加減を加ふべし。普通兩季を通じて一〇アール當窒素、磷酸各一三疋、加里一五疋位を適當とす。肥料の種類は酸性肥料、窒素偏質肥料及び腐敗中多量の酸を生ずる有機質肥料を忌み、腐熟堆肥、魚肥、腐熟鶏糞、草木灰、海藻等を好む。其他大豆粕、油粕、智利硝石、過磷酸石灰、硫酸加里等を用ふるときは、適當に配合して成るべく中性に近からしめ施用すべし。施肥の巧拙は病害の誘因及び有効分蘖の多少、花の重量に至大の關係あるを以て、各土地に應じての工夫研究を要す。

**手入** 本圃にありては、時々中耕、除草を行ひ、四月下旬頃には土寄を行ふ。

#### 第四節 收穫・病害・輸出

**收穫** 六、七月頃漸次開花するを以て、適期を失せず晴天の日に刈取り、麥扱にて扱ぎ落し直ちに薄く擴げて乾燥せしめ、更に兩三

施肥の一例（一〇アール當一六〇疋收量付）  
 十月上旬（秋肥）  
 配合肥料  
 一〇アール當五疋 大豆粕 二疋  
 血粉 四疋  
 智利硝石 八疋  
 過磷酸石灰 二疋  
 硫酸加里 三・五疋  
 十二月下旬  
 腐熟堆肥  
 三月上旬（春肥）  
 配合肥料  
 一〇アール當五疋 魚粉末 二疋  
 蹄角粉 八疋  
 硫安 四疋  
 磷酸アルミナ二疋  
 硫酸加里 三・五疋

收穫適期試験  
 1. 未開花Ⅱ（管狀花充分開かぬもの）  
 干花歩止二四%

日日乾し充分乾燥せしめたる後、濕氣少き所に貯藏すべく、販賣するものは所定の俵裝をなすべし。

收穫の適期は干花歩止及び品質に至大の關係あるを以て、適期を誤らざるやう收穫すべし。段當收量は栽培法によりて差異を生ずと雖も、廣島縣の如く殆ど一ヶ年を以て集約栽培を行ふ地方にありては、一五〇疋乃至二二〇疋を收穫し得。

**病害** 病害中殊に近時被害多きものは除蟲菊菌核病及び腐敗病にして、立枯病よりも一層の注意肝要なり。

**輸出** 除蟲菊は近年海外に輸出せらるゝ額著しく進み、北米合衆國・支那・印度等各地に需要多く年四百萬疋を超ゆ。

### 第四章 蒟 蒻

#### 第一節 性狀・用途

#### 性狀

蒟蒻は天南星科の宿根草にして、莖は球莖、春季一莖一本

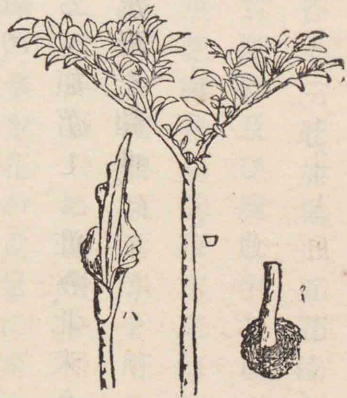
2. 完開花Ⅱ（管狀花充分開きしもの）  
 干花歩止三三%

3. 過開花Ⅱ（管狀花中凸となれるもの）  
 干花歩止三四%

の葉を生ず。葉柄は長大にして一見莖の如く、頂端は數個に分岐し小葉は羽狀片より成り、掌狀複葉をなす。初冬の候に至れば葉は枯死するも、球莖は越冬す。球莖は毎年葉柄の基部に生じ、古き球莖と新陳代謝して次第に大きを増す。かくて四年目(三年生の種薯)より親薯の上面に數個の子薯を生じ、五年目にて最大となり、六年目に開花して遂に萎縮す。花は肉穂花序にして結實すれども繁殖に適せず、専ら子薯によりて繁殖を圖る。熱帯植物なるも強烈なる日光を嫌ひ、多量の水分を必要とするも停滯水を忌む。

用途

蒟蒻の主成分はマンナンにして、水に溶解して糊となりアルカリに遇ひて不溶性の凝固物となる。食用蒟蒻これなり。蒟蒻は生蒟蒻又は凍蒟蒻として食用に供する外、近年工業用と



九六

第二十六圖

- (イ) 球莖
- (ロ) 葉
- (ハ) 花

- 一、相當成長するまでの養分を貯ふ。
- 二、根は貯藏養分の不足するとき上部莖の發端近くより生ず。
- 三、莖の基部に新玉を生じ古薯の位置を占領し發育充實す。
- 四、三四年生の新薯の周圍に數個の子薯を生じ一般に繁殖に用ふ。
- 五、内地にては五、六年、印度地方にては三四年にして花を生ず。

して諸種の糊類・ゴム及びセルロイド代用品染料粘著劑・オブライト・空氣枕・雨具防水塗料・肥料等、用途著しく擴大せられ需要激増しつつあり。

第二節 來歴・現況

來歴

原産地と稱せらるゝ所、日本・ビルマ・支那等種々あれども、ビルマを原産地と見るべく、他は之より輸入せられたるもの如し。栽培作物となりしは三百年位前よりなり。

廣島縣に始めて栽培せられしは天明年間茨城縣より神石郡に傳へられしによるともいひ、又文化五年筑紫より神石郡に入りたるによるとも傳へらる。

現況

世界に於ける主産地は、我が國・支那・印度にして、我が國に於ける作付段別は七〇〇餘ヘクタール、收穫高六千萬疋に達す。岡山・廣島・群馬・福島・茨城の諸縣栽培殊に盛んなり。

天明年間神石郡仙養村の人井上九郎右衛門茨城縣久慈郡及び那珂郡の間部より持ち歸りたりといふ、一説には文化五年來見村宇時安の人吉岡武大夫筑紫より持ち歸りしとも傳ふ。

廣島縣は岡山縣に次ぐ生産額を有し、神石・蘆品・甲奴・御調・佐伯・比婆の諸郡を其の主産地とす。

### 第三節 品種・氣候・土質

#### 品種

品種に赤莖種・青莖種の二種あり。赤莖種は葉の開張平たく莖の色稍淡く、球莖は芽の基部凹陷して大形となり易し。一個四疋に達するものも生じ、専ら實用品種として稱揚せらる。青莖種は葉の開張狭く上方斜に伸長す。球莖は小にして三疋以上に達するもの極めて稀なるのみならず、取扱ひの際毀損し易く又腐敗し易くして收益少し。芽の基部凹状をなさず。

#### 氣候・土質

氣候溫和にして適當の降雨あり、乾燥に失せず排水可良なるを好み、強風及び強烈なる日光を最も忌む。

土壤は表土深く排水可良なる砂礫混りの粘土を最も適當とす。強粘土に栽培せし場合には、成育不良にして収量も亦僅少なれど

も、品質は粘氣強く極めて上等とす。腐植質土に栽培せし場合には生育旺盛にして美且つ大なるものを得れども、品質粗悪精粉少く劣等なり。

### 第四節 栽培法

#### 類別

一年仔 三、四年生蒟蒻は球の表面周圍に多數の子薯を生ず、一箇一五瓦内外なり。之を一年仔又は種玉・カンコ・ドンコ等と呼ぶ。翌年本圃に定植して二年仔を作るか、其の儘放置して二、三年の後掘取るものとす。

二年仔 一年仔を定植して一ケ年間養成したるものを二年仔といひ(平均九〇瓦)、二年仔より凡そ六倍の肥大を見る。俗にミカン玉といひ専ら繁殖用に用ふ。

三年仔 前年養成したる二年仔を定植して更に養成せるものにして、上玉と呼び(平均二七〇瓦)二年仔に比し三倍の増大を見る。

島根縣地方にては赤莖種を平莖種といふ。青莖種は世俗シノト玉と稱す。

廣島縣作付面積及び収量

昭和元	六〇八〇六畝
昭和二	四七九
昭和三	六五四三〇畝

昭和四	五五〇
昭和五	五七五
昭和六	六〇九
昭和六	八二〇五九畝

主要郡別生産額 (昭和六年)

神石	三四三七八
蘆品	一八二五〇六
甲奴	八八二七六
御調	七六五九〇
深安	二五二七五
山縣	一九二六〇
高田	一五八〇五
世羅	一四〇六五

球莖増大步合	年次	一ヶ	前年より
	一年仔	一五瓦	重疊 増大步合
	二年仔	九〇瓦	六倍
	三年仔	二七〇瓦	三倍
	四年仔	七〇〇瓦	二倍半
	五年仔	一〇〇〇瓦	二倍半

食用蒟蒻として使用するは此の年のものよりなり。  
四年仔 市場に搬出する大部分は之にして、四趾にも達し製粉  
用として最も適當なり。

五年仔 品質極めて脆弱となり製粉歩合も少く、臺を抽出する  
もの多く、栽培して實用的ならず。

**種薯の選別** 種薯選別上注意すべき點は次の如し。

- 一、幼芽は鮮なる色澤を有し短大なるもの。
- 二、幼芽の損傷して發芽力なきものは不可。
- 三、無病無傷にして健全なるもの。
- 四、形狀正しく凹凸なきもの。
- 五、肉質緻密なるもの。
- 六、肩は稍張り芽の部凹めるもの。
- 七、種芽の形細長く扁平なるもの。

**種薯貯藏法**

蒟蒻は畑により(山地開墾畑、傾斜地、普通畑、茶桑等  
の間作等)栽培を多少異にすべきも、種薯は毎年秋の末に掘取りて

貯藏し、翌年植返しをなすを普通とす。種薯の貯藏は畧甘藷に準じ、  
屋外又は屋内の土窖中に圍ふこと従來行はれたるも、近時は火棚  
貯藏、共同の火室貯藏等を多く行ふに至れり。尙ほ貯藏前種球の消  
毒を行ふ。

**植付**

蒟蒻は自然生畑を除きては成るべく輪作をなし、麥の畦  
間又は専用畑に植付く。専用畑にありては初冬の候成るべく深耕  
し置き、翌春更に耕耨し、初年生は畦を設けて所定の株間に植付け、  
二年次以上は壺植を行ふ。種薯は正座せしめず芽を斜にして植込  
み、三種位の覆土をなす。麥の畦間に栽植する場合も亦之に準ず。栽  
植距離は種薯の大小により(年次の差により)順次畦幅五〇糎乃至  
七五糎、株間一〇糎乃至五〇糎に擴大す。種薯量は一年生にて一〇  
アール當四〇〇趾(二萬四千個)内外にて、一年を増す毎に遞増個數  
は遞減す。

**肥料**

從來の如く捨作りする場合は間作物の肥料を吸収し、或

種球の植付(段當)

	一個重量	株間	段當重量	植付穴
一年仔	15gr	7cm	225ker	7cm
二年仔	75	16	600	10
三年仔	150	50	1000	13
四年仔	750	80	1700	17

- 種球消毒方法の三
- 一、水一八立に生石灰三・七五趾中に三十分浸漬
- 二、三斗式石灰ボルドー液に三十分浸漬
- 三、フオルマリン三六%液に三十分浸漬



暖地にありては採種するまで種畑にて越冬せしむることあり



は山草下肥を施す程度にて可なるも、進んで収益を収めん爲には必ず適當の施肥を要す。合理的の施肥は其の土質、種薯の年次、分量等により一様ならざるも、大略肥料は堆肥、厩肥を主とし、其の他大豆粕、油粕、下肥、過磷酸石灰、草木灰等を加用し、植付の際種薯の上部に施すこと時にあれど、多くは一番中耕の際種薯の附近に淺く施し覆土するものとす。

施肥の一例三年仔の植付に對し(單位延)

堆肥	四〇〇	堆肥	一一二〇	堆肥	五五〇
其の一 油粕	四二	其の二 下肥	一九〇〇	其の三 豆粕	二〇〇
青草	一一二〇	青草	二二〇〇	木灰	四五
				青草	四〇〇

**手入**

發芽後一〇糶位に伸長したる頃より一、二回中耕を行ひ、第一回中耕の際追肥を施すべし。數本の芽を發生せしときは勢力旺盛なるもの一本を残して他は除去すべし。夏季日光の直射を防

ぐには、雜草又は藁稈類を株間に撒布するを可とす。

**第五節 收穫・製粉**

**收穫**

十月乃至十一月頃葉の萎凋するを待つて、鋏又はカナカキを以て傷けざるやう掘取るべし。一〇アール當收量は二年仔又は三年仔を植付けたる場合に三千疋乃至三千七百疋なり。

**製粉**

蒟蒻を製粉するには、竹篋等にて薯の芽を抉り取り、桶に入れて摩擦したる後陽乾して七糶内外の厚さに切り、長さ五〇糶の竹串に刺し、數個連結して一週間内外陽乾したる後、打碎きて製粉し販賣用に供す。荒粉より精粉を得るには、石臼にて搗碎き又は製粉機にて細粉し選別す。生薯に對する荒粉の割合は一五乃至二〇%を普通とす。

**病蟲害**

病害には葉枯病、白絹病、腐敗病、葉縮病、害蟲には金龜子、蟋蟀、線蟲等あり。

## 第五章 茶

### 第一節 性狀・用途

#### 性狀

茶は山茶科に屬する常綠灌木にして、葉は披針形又は長橢圓形にして鋸齒あり。花は白色五瓣にして美しく、秋冬の頃に開き翌年の秋結實す。果實は堅き蒴果にして、成熟すれば開裂して普通三個の種子を露出す。

#### 用途

此の作物は嫩葉を採りて綠茶・紅茶等に製し、湯にて浸出して飲料となす。葉には茶素揮發油・タンニン・ビタミン等を含む。茶素は一種のアルカロイドにして、其の量は玉露に多く番茶に少し。揮發油は茶に芳香を、タンニンは澁味を附與せり。

### 第二節 來歴現況

#### 來歴

茶は我が國・支那・東印度等に自生するも、始めて之を飲料に供せしは支那なり。我が國にて現今栽培するものは支那より輸入せしものにて、建久二年の頃僧榮西、宋より携へ歸りて、肥前の脊振山に植ゑしに始まるが如し。宇治の茶園は足利義滿に起因するものなり。

#### 現況

維新前は茶の需要専ら國內に限られしが、近來外國に於ける需要の増加に伴ひ輸出頗る増加し、生絲に次ぐ重要貿易品となれり。

内地に於いて茶の栽培最も盛んなるは靜岡縣にして、京都・三重・鹿兒島・熊本・茨城・埼玉の諸縣之に次ぐ。近年は臺灣にも栽培盛んとなれり。

廣島縣に於いては、茶は主に畦畔・宅地の空地を利用して栽培せられ、茶園の見るべきもの少し。されど其の栽培適地は少からず、將來有望なる作物の一たり。山縣・世羅・神石・雙三の諸郡は現今に於い

ては縣内有數の茶産地なり。

### 第三節 品種及び氣候・土質

#### 品種

茶には支那茶・印度茶並に兩種の雜種たる印度支那雜種茶などの別あり。我が國に栽培するものは支那茶に屬し、葉の形によりて柳葉・圓葉・縮緬葉に分たる。就中柳葉と稱し、葉形細長く葉肉厚く、小枝を生ずること多きもの最も貴重せらる。

#### 氣候

茶は炎熱多雨の氣候に好適する作物にして、寒氣と乾燥とを忌む。年平均溫度十七八度の所は生育最も良く、本邦にては東海岸に於いては常陸、西海岸に於いては越前を以て栽培の限界とす。

#### 土質

土層深く排水佳良なる砂壤土又は壤土を好み、土層淺き所、卑濕の地を忌む。河岸の傾斜地にして水蒸氣に富み、寒風を受けざる所は茶の發育殊に良好なり。

豊田郡榎梨村は茶樹の生育に適し、舊藩時代淺野家に御茶御用として献上せる記事、藩通誌に存す。此の茶は特に鷹の爪と稱せり。

### 第四節 栽培法

#### 繁殖法

茶を繁殖せしむるに、熱帶・亞熱帶の地にては分株・壓條の法を用ふることあるも、我が國にては直播法又は苗木立法・挿木法によれり。

(一) 直播法 種子としては品種及び園相の成るべく一定せる採種より、完熟せるもの又は完熟に近き中粒以上の重きものを採りて用ふべし。

採種せる種子は先づ十日前後陽乾したる後、雨雪の當らざる乾燥地に深さ一米位の孔を穿ち、之に乾燥せる細砂を敷き、種子と砂と交互に埋め、漸次層をなさしめ、最後に三〇糶位の深さに土を盛り置くべし。又簡易に貯藏せんには、風乾したる種子を吠に入れ、鼠害なき乾燥納屋に貯藏すべし。採種は十一月中旬、霜降すべし。採種は春秋二期にて、冬期寒冷甚しき地方は秋季採種せる種

種子は一立の重量五百乃至六〇〇瓦、粒數九〇〇内外、種皮濃灰色、成るべく球形をよしとす。

子を貯藏し置き、翌春三月中下旬に於いて播下すべく、冬期温暖なる地方は採種後直ちに十月下旬乃至十一月中旬播下すべし。秋播概して良好なれば、春播は成るべく早く行ふことに努むべし。

播種法に株播、條播の二あるも、近時摘採に缺を用ふるを以て新植には多く條播行はる。

株播は一・三米乃至二米幅の畦上に、一米乃至一・三米を距て、直徑三〇糎乃至五〇糎に圓周を劃し、其の周邊に數十粒の種子を播く。條播は條間を一・八米とし、畦上に一條幅二〇糎乃至五〇糎又は二條條の間隔三〇糎乃至五〇糎に播き溝を切り、之に三〇糎につき十五粒乃至二十粒の割合にて播下す。畦の方向は平地にありては南北とし、傾斜地は直角とすべし。一〇アールに要する種子量は七〇立内外なり。

春播を行ふときには必ず數日間の浸種を要す。播種には先づ三〇糎餘の穴を穿ち、中に堆肥、下肥等を施し土を覆ふて下種し、三糎

主要郡別栽培面積  
山縣 四二  
世羅 三三  
佐伯 二六  
高田 二五  
雙三 二一  
豐田 一七  
神石 一七  
賀茂 一五

内外の覆土をなし、鎮壓したる後藁稈又は籾殻を被ひ置くべし。  
(二)苗木仕立法 苗木を設けて之に下種し、一年生の幼樹を新植する方法にて、土地の状況によりては有利なる場合あり。

苗木は乾燥せざる低地に設け、床幅一・三米の短冊形畦とし、三・三平方米當五百乃至八百粒の種子を播下す。發芽後は再三間引を行ひ、優良強健なる種苗の育成に努むべし。

移植は春秋何れにても可なるも、成るべく曇天の日又は夕方頃を選び、苗木は移植前充分灌水して土壤の崩壞を防ぐ外、移植後も必ず充分灌水すべし。土壤粗鬆なるときは粘土を客入すべし。

(三)挿木法 本年伸長せる二番芽を翌年梅雨の候に三葉を附し、芽の二分の一位を土中に挿入し、第一、第二葉の附著部より發根せしめ、苗木を得る方法にして乾燥に過ぎざるやう水濕に注意の要あり。

幼樹の保護 何れの繁殖法によるも、幼樹の保護は最も大切に、管理周到なれば早く摘採期に達し、然らざれば發育遅れ經濟上

の不利を招来す。殊に發芽後旱天打續くときは枯死苗を生ずるを以て、適宜防旱灌水の法を施すべし。

初年の肥料は夏季稀薄なる液肥を施し、次年は更に九月下旬乃至十月上旬、鯨粕・油粕・大豆粕・堆肥・米糠等成園の三分の一量を施用すべし。

**剪枝・臺刈**

茶は四年目頃より毎年一回づゝ剪枝を行ひ、以て樹形を整理し摘葉に便ならしむ。樹形は半圓形を普通とし、高さは缺刈は七〇糎、手摘は一米位を適當とす。剪枝を怠るときは常に摘葉に不便なるのみならず、樹勢の衰弱を來す。通例摘葉後直ちに之を行ふものとす。

樹勢大いに衰弱し收量甚しく減少するに至れば、地上二〇糎位の所より刈取りて新條を發生せしむ。之を臺刈といふ。新植園は十年にして成園となり、一番茶普通は三〇〇坵、多きは六〇〇坵の摘採可能なり。五十年までは收量を増し、其後漸次減少するも品質は

優良となる傾向あり。通常五十年にして臺刈を行ふ。

**肥料**

下肥・油粕・大豆粕・魚肥・堆肥・草肥等を用ひられ窒素質肥料を主要肥料とす。窒素質肥料は收葉を増すのみならず、葉を軟にし摘採期を長からしむるによる。就中下肥・油粕・鯨粕は收量、品質共に良好ならしむる良肥料として尙用せられつゝあり。

施肥は年數回に行ふ。基肥は九月下旬乃至十月上旬に施し、翌春の發芽に最も大切なる秋芽の養分を供給すべく、冬肥は二月上旬、夏肥は六月下旬乃至七月上旬に施すべし。春夏の候は茶樹の發育最も旺盛なる時期にして、養分の吸收著しく殊に乾燥に陥り易き時期なれば液肥の施用可なり。敷藁は夏季の早魃を防ぎ、土壤を改良せしむるにも必要なるを以て、成るべく多量に用ひ、若し敷藁不十分ならば茶園の間作として綠肥を放込むこと有利なりとす。

**虫害**

虫害には葉捲蟲・蛄・蠶・避債蟲・浮塵子・蚜蟲・赤壁蝨等あり。

## 第六章 大麻

### 第一節 性狀・用途

#### 性狀

大麻は桑科に屬する雌雄兩株の一年生草本なり。其の莖は高さ普通一・八米乃至二・一米葉は掌狀複葉にして五乃至九個の小葉より成り、對生なるも柱頭にては互生せり。雄花は圓錐花序をなし、雄株の梢頭に生じ、萼片雄蕊共に五個、雌花は穗狀をなし雌株の葉腋に生じ、一個の萼と二個の柱頭ある雌蕊より成る。種子は殆ど圓く灰色又は黒色にて斑紋を有し、約三〇%の脂油を含む。

#### 用途

莖の皮より製する靱皮纖維は、種々の織物・網・綱・絲等の原料とし、種子より油を製する外、小鳥の飼料又は香味料等に用ふ。又稗は燻燒して懷爐灰とす。

### 第二節 來歴・現況

廣島縣の大麻栽培は遠く三百餘年永録年間に昔にして、今尙ほ我が國に於ける屈指の産地なり。然れども現今は棉絲の供給豊富低廉なると、蠶業の發達に伴ふ桑園の増加により、漸次栽培面積は減少を見つゝあれども、疊の原料としては重要な作物なり。

### 第三節 品種・氣候・土質

#### 品種

在來太田苧種と稱し、嫩芽青緑にして外皮淡褐色のもの、と、野州白木種との二種あり。山縣郡・安佐郡に於いては兩種を栽培し、雙三郡には野州種多く栽培せらる。品質には兩種著しき差別を認めず。

#### 氣候・土質

大麻は熱帶より温帶に互りて栽培せらるゝも、温帶に産するもの纖維良質なり。その成長期間は空氣の濕潤を好み、成熟期は乾燥するを可とす。

適地は砂壤土にて壤土之に次ぐ。粘土は最も劣悪なり。砂土にし

世界中栽培の盛んなる國は露國、伊太利、支那等なり我が國の主産地は栃木縣にして長野・廣島・熊本・宮崎等の諸縣之に次ぐ  
廣島縣栽培面積  
四九五・八七ヘクタール  
收穫高  
六六八九二五疋  
廣島縣に於ける主産地  
山縣・沼隈・御調・雙三・安佐・高田の各郡

て乾燥せる土地に生産するものは、發育早く纖維強靱なり。廣島縣の主産地たる安佐郡は太田川沿岸の沖積層より成り、山縣郡は花崗石の崩壊せる土壤より構成せらるゝもの大部分にして、一部に秩父古生層あり。雙三郡は秩父古生層より成る壤土及び埴土なり。

#### 第四節 栽培法

##### 選種

翌年使用すべき種子は、普通栽培畑地の周圍に於いて枝楡の特に繁茂せるものにつき、雄木(開花するもの)二本に對し雌木十本位の比を以て残存せしめ、他を抜き去り秋土用まで放置し、麻の實茶褐色となるに及び根元より刈取り乾燥し、五六日を経て充分乾くを待ち筵の上にて揉み落し、唐箕にて簸別し桶等の器に入れ足にて踏み、粗皮を去りて別に簸別し、後篩にて小粒種を除き去るものとす。

##### 本畑整地

前年の冬畑一面に厩肥を撒布し置き、春三月頃に至

りて傾斜地は高さより低きに向ひ、畑の一方より深さ一五糎位の縦溝を穿ち、冬季撒布せる厩肥その他の雜草を埋め込み(埋め打ち)畑全面に之を行ひ、後地面を均平とし、畦間を二四糎乃至三〇糎位とし、幅一〇糎位の板鍬にて深さ一五糎位の縦溝を立て、播種の用意をなす。土地によりては前作物の跡地を春播種前に耕耨し、馬耙にて均平になせり。

##### 播種

春の彼岸を最適期とし一〇アール當五立位を前記の縦溝に播種し、箒を以て畦間の細土を掃き込み覆土す。

##### 肥料

土地により多少の差異あれども、基肥には普通厩肥を一〇アール當一〇〇〇疋位用ひ、播種するとき焼土・練粕・下肥等を施用す。施用量は下肥五荷・練粕一八疋位なり。追肥は四月上旬第一回として下肥十荷、第二回下肥十荷、又は練粕五二疋、或は人造肥料を施用す。

##### 手入

發芽後最も重要な作業は間引にて、普通三十六糎に成

長したる頃より三、四回行ふ。第一回間引後十日位を経て第二回を行ひ、一時に極端の間引を行ふべからず。

四月上旬六糶位に伸長したる頃、中耕除草を行ひ、一五—一八糶に成長せば約二米の距離に三十本位とし、四五糶に至るまでは時畑に入り、風蟲害の爲に挫折倒伏せしもの、或は軟弱なるものを抜き取り、三平方米に付約百五十本とするを普通とす。

大麻の種子は雀の最も好むものなれば、播種後苗の三糶位に成長するまでは絶えず監視をなすべし。害蟲としては夜盜蟲の害最も激甚にて、收量及び品質に影響すること甚大なれば、晝間大麻の根際に潜伏せる幼蟲を捕殺すべく、害殊に甚しきときは溝渠遮斷法を行ふべし。

### 第五節 收穫調製

#### 收穫

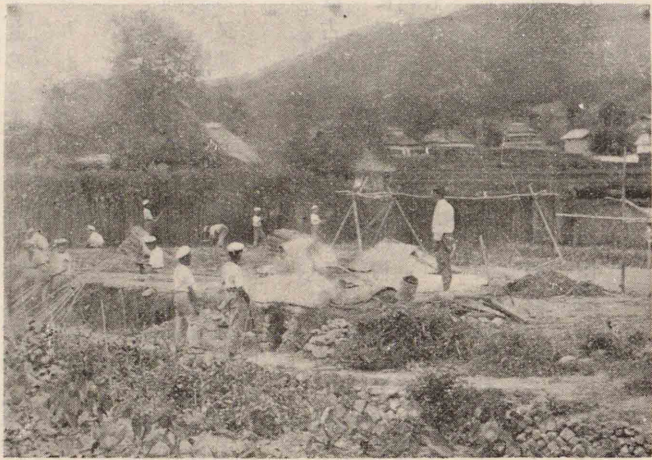
大麻成熟の適期は莖幹稍褐色を帯び梢端に異様の葉を

生ずるときにて、之を過ぐれば麻皮強硬となり、早きに過ぐるときは軟弱に失するの虞あり。

收穫は晴天を見計らひ早朝より著手すべく、先づ二三本づゝを竹片を以て枝葉を打ち去り、根部三糶位の所より切斷するか、又は鎌にて土際より刈倒し、一一坵位の小束として筵の類を覆ひ置く。

#### 調製

收穫したる大麻は之を麻蒸釜にて蒸し、乾燥したる後貯藏し置き、農閑の際取出し、川水等に浸漬し剥皮したる後、乾燥し粗苧となす。粗苧は更に精製して各種の製造に供す。



第二十七圖  
大麻收穫及び蒸釜



### 第七章 薄荷

#### 性状・用途

薄荷は唇形科に属する宿根草にして、其の莖葉より薄荷油を精製す。薄荷油は無色透明にして、香味主要成分はメントールなり。石鹼口中香劑、齒牙石鹼、齒牙丁幾リキニール酒等に混用し、又藥劑、菓子等に使用す。

薄荷腦はメントールの結晶性を利用して薄荷油より分離したるものにして、齒牙粉、興奮劑、偏頭痛、筆鼻加答兒粉、薰蒸劑等に加用せらる。又薄荷腦を溶融して薄荷玉を製し、携帶香料となす。

#### 來歴・現況

薄荷は支那の原産にして、我が國には古くより栽培せらる。廣島縣に始めて栽培せられしは安政當初にして、蘆品郡近田村に始まり、後同郡服部村に傳はり、爾來他郡に傳播し、蘆品深安、沼隈御調等の諸郡今日最も盛んに栽培せらる。

盛んに栽培せらるゝに至りしは明治維新後にして、殊に大正二三年頃は海外輸出激増して其の頂點に達し、大正七八年頃稍衰微し、最近再び盛んになり、今や我が國一箇年の薄荷製品輸出額は三四百萬圓に達するに至れり。主産地は北海道岡山、廣島香川、沖繩の諸縣なり。

#### 品種

薄荷は日本種、西洋種に大別し、日本種中主なる品種は次の如し。

- 一、青丸葉 丸形花淡紫 莖緑 性强 品質稍劣る
- 二、赤丸葉 同 同 莖赤紫 性不强 最上
- 三、青柳葉 柳形花白又は赤 莖緑 性健 劣る
- 四、赤柳葉 同 同 莖緑 性弱 上

#### 氣候・土質

薄荷は乾燥せる氣候を好む。特に收穫期に於いて然りとす。蓋し氣候濕潤なれば莖葉繁茂するも腦油少きによる。但し成長中は空氣稍濕潤にして適度の降雨あるを要す。此の時期に乾燥に過ぐれば莖葉の發育不良となるを以てなり。

土質は肥沃なる壤土を最も適當とす。

#### 栽培法

薄荷は植付後連年收穫し得べし。廣島縣に於いては一年毎に植替を行ふを普通とす。多く畑に作るも時に田地に作らるゝことあり。此の際に於ける輪作法は次の如し。

田地の例	第一年	薄荷	畑地の例	第一年	薄荷
	第二年	麥		第二年	麥・豆・蕎麥
繁殖は分根又は分株による。分根法は秋植するとき用ひ、分株法は専ら春季新芽一	第二年	稻	第三年	薄荷	
	第一年	薄荷			

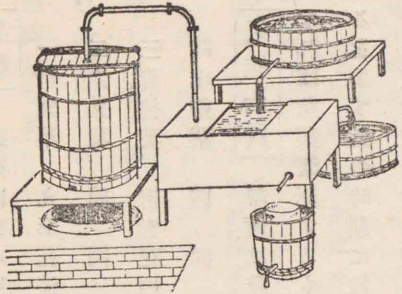
我國年産額

作付段別	收穫高	價額
大正五年	12013.2町	17137282圓
大正十年	4950.3町	4216435圓
大正十五年	11618.6町	10301412圓

○種位に伸長したる頃株を掘取り分割栽植するをいふ。  
 植付は豫め本圃を耕起したる後畦幅五〇種の作條を設け七八種の株間を以て種根  
 二、三本づゝ植付け覆土をなす。

肥料は堆肥・魚肥・油粕・大豆粕・下肥・硫酸アンモニヤ・過磷酸石灰・木灰等を發芽前及び發  
 芽後數回に分施す。三要素の適量は土地によりて異なるも、大略窒素二〇疋、磷酸八疋、加里  
 一五疋内外とす。

生育旺盛となれば中耕は行ひ難きを以て、春季發芽前後に一回行ひ、除草は二、三回、工  
 寧に行ふべし。



**收穫** 北海道にては九月に一回收穫するのみなれども、廣  
 島縣に於いては二、三回收穫をなせり。六月上旬、八月上旬、十  
 月上旬の三回これなり。收穫の適期は莖葉繁茂後黄綠色を呈  
 して莖の組織稍堅實となり開花を催せしときにして、晴天を  
 見計らひ刈取るべし。刈取れる莖葉は繩に編み軒下等に懸垂  
 し陰乾すべし。

**調製** 乾燥したる莖葉は蒸桶に充填して蒸溜す。乾燥せる  
 莖葉よりは〇七乃至一五%の取卸薄荷を得べし。之を水にて

五度以下に冷却せしむれば薄荷腦は結晶して薄荷油と分離するを得。その割合腦四、油  
 五内外なり。

**收量** 一アール當收量は、年一回收穫する地方にては乾莖葉二〇疋乃至三五疋内外。  
 二番刈、三番刈を行ふ地方にては七〇疋乃至一〇〇疋位なり。收量は二番刈は一番刈よ  
 も多く、三番刈は更に二番刈よりも多きを常とし、腦油分も亦二番刈は一番刈に勝るも  
 のなり。

**輸出** 薄荷腦は北米合衆國、獨英佛、薄荷玉は蘭領印度、香港、支那等に、薄荷油は英佛に  
 輸出せらる。

**病蟲害** 赤澁病の豫防には石灰ボルドー液を撒布すべく、根切蟲、螟蛉等は抑殺し、蚜  
 蟲には除蟲菊石鹼水を撒布すべし。

## 第八章 泊芙蘭

小亞細亞の原産にして、我が國には明治十九年佛國より輸入す。薬用となるは主とし  
 て柱頭に於て健胃劑、鎮痛劑、通經劑、婦人病藥、食品染色劑として用ひらる。

寒氣に抵抗力強く、濕潤に非ざる高燥地、腐植質に富む砂壤土を適當とし、桑園、果樹園  
 の間作として可なり。

第二十八圖  
薄荷蒸溜機

主産地  
 外國 伊國・佛國・  
 米國・埃國・  
 スペイン  
 我國 神奈川・靜  
 岡・佐賀・兵  
 庫・千葉の  
 諸縣  
 廣島縣 瀨田・神  
 安・御調・神  
 石の諸郡

繁殖は球根による。九月に畑をよく耕起し肥料を施して栽植す。畦幅二〇糎、株間七乃至一〇糎、深さ一〇糎とし、一〇アール當八萬乃至十萬の種球を要す。小球は多く大球は少くして可。

肥料の一例(一〇アール當)

十月開花前下肥三五〇疋、過燐酸石灰三五疋(下肥は堆肥にて代用するも可)十二月開花後木灰四〇疋、大豆粕四〇疋、下肥四百疋。

泊芙蘭は空地利用に適すれども、防旱のため瓜、南瓜、大豆、扁蒲、小豆等の間作となすもよし。此の際は三、四年に一回位掘取り植替をなすべし。

採收は五月中旬より六月中旬頃までに(葉の黄色に萎れしとき)丁寧に掘取り、選別乾燥の後、吟等に入れて貯藏す。

廣島縣には明治三十年頃より栽培せらる

家庭實習地設計表 (稻作之部)

耕作地位位置面積		苗地位位置面積		長校		議合		任主	
地勢、土産、表土、心土トノ状態、灌溉排水ノ良否									
前年度現況		本年度設計							
品種	採種方法	選種方法	浸種方法	整地	播種期日	十アール當種子立一平方米當播種	十アール當種子立一平方米當播種	立	立
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
一株ノ本數	插秧期日及深	耕耨深サ	整地期日方法	管理方法	並十アール當種子立一平方米當播種	並十アール當種子立一平方米當播種	並十アール當種子立一平方米當播種	並十アール當種子立一平方米當播種	並十アール當種子立一平方米當播種
月	日	日	日	日	月	日	月	日	月
本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
糎	糎	糎	糎	糎	糎	糎	糎	糎	糎

家庭實習地設計表

設計期 昭和 年 月	備考 他收料肥 參量天ト 考災作ノ トナル有ノ ベキ無關 モ七程係、 ノ度段當 肥	當本肥田料		當苗肥代料		田				
		合計 瓦 圓	合計 瓦 圓	合計 瓦 圓	合計 瓦 圓	收 獲	驅 除 調 製	病 除 豫 防	除 草 方 法	日 期

施 肥 期 月 日	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓

注 意 項 目	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓	計 瓦 圓
其 他							

家庭實習地成績表 (稻作之部)

長校  
議合  
任主

耕 地 面 積		地 勢 土 性		調 査 事 項		育 成 成 績		栽 培 法	選 採 品		苗		代 本		本			
面積 畝	畝	性	性	大	暑	二百十日	秋		分	草 丈	莖 數	整 否	色 合	播 種 期	播 種 地	播 種 方 法	播 種 期	播 種 地

支 算	勞 務	銀 資	資	調 査 項 目		收 支 計 算																	
本 田 肥 料	苗 代 肥 料	種 子 計	小 計	其 他 手 入	收 獲 調 製	病 蟲 防 除	灌 溉	除 草	插 秧	本 田 整 地	苗 代 整 地 管 理	數 量	單 價	價 額	數 量	單 價	價 額	數 量	單 價	價 額	數 量	單 價	價 額

家庭實習地成績表

備考	肥料代苗當ル <sup>-ア-</sup>		肥料本當ル <sup>-ア+</sup>		田																																																																																																																																																																																
	合計	合計	合計	合計	除草方法	日期	日期																																																																																																																																																																														
	肥	肥	肥	肥	除	日	日																																																																																																																																																																														
天候ト肥料關係	合計	合計	合計	合計	病蟲害驅除預防	月( )日( )	月( )日( )																																																																																																																																																																														
	肥料名總數	肥料名總數	肥料名總數	肥料名總數	收穫調製	月( )日( )	月( )日( )																																																																																																																																																																														
金額				原肥	追肥	有效三成分																																																																																																																																																																															
施用量第一回量第二回量(澆灌)加里																																																																																																																																																																																					
調査期	昭和	年	月	日	住所氏名																																																																																																																																																																																
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">調査</th> <th rowspan="2">考</th> <th rowspan="2">參</th> <th colspan="2">算決</th> <th colspan="2">入</th> <th colspan="2">出</th> <th colspan="4">本</th> </tr> <tr> <th>差</th> <th>支</th> <th>總</th> <th>雜</th> <th>雜</th> <th>農</th> <th>依</th> <th>害</th> <th>農</th> <th>水</th> <th>依</th> </tr> <tr> <th>金</th> <th>土</th> <th>一</th> <th>引</th> <th>入</th> <th>計</th> <th>穀</th> <th>米</th> <th>米</th> <th>費</th> <th>具</th> <th>費</th> <th>蟲</th> <th>具</th> <th>費</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>錢</td> <td>地</td> <td>日</td> <td>入</td> <td>出</td> <td>入</td> <td>類</td> <td>米</td> <td>米</td> <td>費</td> <td>損</td> <td>費</td> <td>防</td> <td>損</td> <td>費</td> </tr> <tr> <td>貸</td> <td>ニ</td> <td>ノ</td> <td>引</td> <td>出</td> <td>入</td> <td>類</td> <td>米</td> <td>米</td> <td>費</td> <td>料</td> <td>費</td> <td>除</td> <td>料</td> <td>費</td> </tr> <tr> <td>借</td> <td>對</td> <td>勞</td> <td>入</td> <td>出</td> <td>入</td> <td>類</td> <td>米</td> <td>米</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> </tr> <tr> <td>ノ</td> <td>ス</td> <td>働</td> <td>入</td> <td>出</td> <td>入</td> <td>類</td> <td>米</td> <td>米</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> </tr> <tr> <td>利</td> <td>ル</td> <td>報</td> <td>入</td> <td>出</td> <td>入</td> <td>類</td> <td>米</td> <td>米</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> </tr> <tr> <td>廻</td> <td>リ</td> <td>酬</td> <td>入</td> <td>出</td> <td>入</td> <td>類</td> <td>米</td> <td>米</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> <td>費</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>男</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>女</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>								調査	考	參	算決		入		出		本				差	支	總	雜	雜	農	依	害	農	水	依	金	土	一	引	入	計	穀	米	米	費	具	費	蟲	具	費	錢	地	日	入	出	入	類	米	米	費	損	費	防	損	費	貸	ニ	ノ	引	出	入	類	米	米	費	料	費	除	料	費	借	對	勞	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費	ノ	ス	働	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費	利	ル	報	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費	廻	リ	酬	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費			男																														女												
調査	考	參	算決		入		出				本																																																																																																																																																																										
			差	支	總	雜	雜	農	依	害	農	水	依																																																																																																																																																																								
金	土	一	引	入	計	穀	米	米	費	具	費	蟲	具	費																																																																																																																																																																							
錢	地	日	入	出	入	類	米	米	費	損	費	防	損	費																																																																																																																																																																							
貸	ニ	ノ	引	出	入	類	米	米	費	料	費	除	料	費																																																																																																																																																																							
借	對	勞	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費																																																																																																																																																																							
ノ	ス	働	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費																																																																																																																																																																							
利	ル	報	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費																																																																																																																																																																							
廻	リ	酬	入	出	入	類	米	米	費	費	費	費	費	費																																																																																																																																																																							
		男																																																																																																																																																																																			
		女																																																																																																																																																																																			

(備考欄ニハ病蟲害及ビ風水害旱害等ノ場合ハ被害及ビ當時ノ状況ヲ記入シ且ツ其他栽培上参考タル可キ事項ヲ記載スベシ)

穀物検査規則拔萃 (昭和七年三月三十一日 廣島縣令第十四號)

- 第一條 本則ニ於テ穀物ト稱スルハ玄米精米小麥裸麥及菜種ヲ謂フ
- 第八條 検査ハ穀物ノ品質形狀色澤乾燥調製容量又ハ重量包裝ニ付之ヲ行ヒ其ノ品位ニ依リ検査等級ヲ決定ス
- 第九條 検査等級ハ左ノ通り定ム
  - 玄米大粒及小粒各別 一等二等三等四等等外
  - 小麥及裸麥 一等二等三等四等等外
  - 精米及菜種 一等二等三等等外
- 災害ノタメ穀物ノ品位ヲ著シク損シタル場合知事ニ於テ必要アリト認メタルトキハ前項ノ検査等級ニ玄米小麥及裸麥ニ在リテハ四等ノ下ニ五等精米及菜種ニ在リテハ三等ノ下ニ四等ヲ増設スルコトアルヘシ此ノ場合ニ於テハ豫メ之ヲ告示ス
- 第十一條 検査ヲ受クル穀物ノ一包裝ノ容量及重量ハ左ノ各號ニ依ルヘシ
  - 一 玄米ノ一包裝ハ七二・二六立(約四斗)トスルコト但シ四月一日ヨリ同年八月三十一日迄ハ七二・七〇立(約四斗三合)トスヘシ
  - 二 精米ハ六〇疋(十六貫)又ハ三十疋(八貫)トスルコト

三、小麥裸麥及菜種ハ六〇疋(十六貫)トスルコト  
 第十二條 検査ヲ受クル穀物ノ包装ハ玄米ニ在リテハ二重俵裝精米小麥及裸麥ニ在  
 リテハ二重俵裝、又ハ袋、菜種ニ在リテハ袋又ハ吠トシ其ノ包装方法ハ左ノ各號ニ  
 依ルヘシ

一、二重俵裝

(註 本篇二十七頁挿圖参照)

二、吠

(一) 六十疋入吠

- イ、 苳ハ長サ一・七〇米約五尺六寸六分仕上リ外側〇・九〇米約三尺内側〇・七八  
 米(約二尺六寸)幅〇・七五米約二尺五寸重量一九疋(約五百匁)以上トスルコト
- ロ、 織リ方ハ縱繩三十六筋ヲ立テ緻密ニ織リ上ケ兩端ニ丈夫ナル耳繩ヲ當テ  
 細繩ヲ以テ縫目三十八個所以上ヲ堅固ニ縫ヒ合セ耳繩ノ兩端ハ長サ〇・四五  
 米(約一尺五寸)内外ヲ殘シ置クコト
- ハ、 繩ハ二重俵裝ニ用フルモノト同シクスルコト
- ニ、 仕立方ハ吠口ヲ十分ニ卷キ耳繩ノ兩端ハ中央ニテ結ヒ合セ縱繩ハ三個所  
 二重廻リトシ吠口ニテ荷造結ト爲シ横繩ハ二筋ヲ以テ二個所掛トシ各縱繩

ニ捲掛ケ緊括スルコト但シ上部横繩ニ限り男結ヒトシ卷封ヲ施シ得ル部分  
 ヲ存スルコト

(二) 三十疋入吠

- イ、 苳ハ一・三二米約四尺四寸仕上リ外側〇・六九米(約二尺三寸)内側〇・六三米(約  
 二尺一寸)重量一・一三疋(約三百匁)以上トスルコト
- ロ、 織リ方ハ縱繩三十筋ヲ立テ緻密ニ織リ上ケ細繩ヲ以テ縫目十八個所ヲ堅  
 固ニ縫ヒ合セ縱繩ノ兩端ハ長サ〇・四五米(約一尺五寸)内外ニ殘シ置クコト
- ハ、 繩ハ六十疋入吠ニ用フルモノト同シクスルコト
- ニ、 仕立方ハ六十疋入吠ト同シクスルコト但シ横繩ハ二筋ヲ以テ一個所掛ト  
 シ各縱繩ニ捲掛ケ緊括スルコト

(三) 袋

- イ、 袋ハ麻又ハ木綿製ノモノヲ用ヒ脱漏ノ虞ナキ素質強靱ナルモノヲ用フル  
 コト
  - ロ、 仕立方ハ袋ノ小口ヲ太キ麻絲ニテ嚴密ニ縫ヒ合スコト
  - ハ、 繩ヲ掛クル場合ハ二重俵裝ニ用ヒルモノト同シキ繩一筋ヲ以テ縱繩及ヒ  
 横繩各一個所二重廻リトシ縱繩ト横繩トカ交錯スル個所ハ捲掛トスルコト
- 穀物検査規則拔萃

本縣内ニ於テ醸造其他ノ製造原料トナス穀物ニシテ鐵道又ハ船舶ニ由ラスシテ運搬シ醸造若ハ製造ノ場所又ハ其ノ藏置所ニ於テ受渡ヲ爲スモノハ農産物検査所長ノ許可ヲ受ケ前項ノ包裝方法中二重俵裝ニアリテハ縦繩ヲ省略シ吠ニアリテハ縦繩及横繩ヲ各一個所掛ト爲スコトヲ得

除蟲菊検査規則拔萃 (昭和七年五月六日 廣島縣令第二十號)

第一條 本則ニ於テ除蟲菊ト稱スルハ本縣内ニ於テ生産シタル除蟲菊ノ乾花ヲ謂フ  
第七條 検査ハ除蟲菊ノ品質形狀色澤乾燥調製重量及包裝ニ付之ヲ行ヒ其ノ品位ニ依リ検査等級ヲ決定ス

第八條 検査等級ハ一、二、三、及等外トス  
災害ノ爲除蟲菊ノ品位ヲ著シク損シタル場合知事ニ於テ必要アリト認メタルトキハ前項ノ検査等級三等ノ下ニ四等ヲ増設スルコトアルヘシ此ノ場合ニ於テハ豫メ之ヲ告示ス

第十條 検査ヲ受クル除蟲菊ノ包裝ハ素質強靱ナル麻製一重袋トシ長サ一米三尺三寸幅〇七二七米約二尺四寸重量一〇五疋約二百八十匁以上ノモノヲ使用スヘシ袋ノ仕立方ハ其ノ小口ヲ太キ麻糸ニテ嚴密ニ縫ヒ合スヘシ

第十一條 検査ヲ受クル除蟲菊ノ一袋ノ正味量ハ二十五疋約六貫七百匁トスヘシ

蒟蒻検査規則拔萃 (昭和八年十月二十一日 廣島縣令第三十三號)

第一條 本令ニ於テ蒟蒻ト稱スルハ本縣内ニ於テ生産シタル蒟蒻ノ生薯及切干ヲ謂フ

第五條 蒟蒻ノ検査區分ハ生薯ニアリテハ形狀ニ依リ大・中・小及混合更ニ品位ニ依リ合格不合格切干ニアリテハ品位ニヨリ一、二、三、及等外トス

災害ノ爲蒟蒻ノ品位ヲ著シク損シタル場合知事ニ於テ必要アリト認ムルトキハ前項切干ノ検査區分三等ノ下ニ四等ヲ増設スルコト在ルヘシ此ノ場合ニ於テハ豫メ之ヲ告示ス

第七條 検査ヲ受クル一捆ノ正味量ハ生薯ニアリテハ五十六疋約十五貫切干ニアリテハ四十五疋(十二貫)トスヘシ

第八條 検査ヲ受クル蒟蒻ノ包裝ハ生薯ニアリテハ一重俵裝切干ニ在リテハ袋トシ其ノ包裝方法ハ左ノ各號ニ依ルヘシ  
一、一重俵裝

イ、菰ハ乾燥セル粗纒藁ヲ用ヒ一・五・一五米約五十尺ノ編繩ヲ四切リトシ編封四個所封間各〇・二一米約七寸菰端〇・二八米約六寸編房數七十五以上菰丈一・三六  
蒟蒻検査規則拔萃

米約四尺五寸重量二四四疋約六百五十匁以上トスヘシ

ロ、棧俵ハ乾燥セル粗線藁ヲ用ヒ緻密ニ配列シ形狀圓形直徑〇三六米約一尺二寸重量〇三七疋約百匁以上トスヘシ

ハ、繩ハ打柔ケタル藁ヲ以テ綯ヒ擦掛トシ口繩ハ周リ約〇〇三米約一寸横繩及縱繩ハ周リ〇〇三七米約一寸二分トスヘシ

ニ、口及尻ハ菰端ヲ折曲ケ棧俵ヲ當テ菊形膝トスヘシ

ホ、横繩ハ五個所各二重廻トシ繩端ハ荷造結トスヘシ

ヘ、縱繩ハ二筋ニテ二方掛トシ中央横繩ヲ除キ他ノ横繩ニ悉ク捲キ掛ケ繩端ハ俵口ニ於テ引締メ男結トシ卷封ヲ施シ得ル部分ヲ存シ尙中央横繩ノ上ヨリ二重廻リニ胴繩ヲ施スヘシ

二 袋  
イ、袋ハ麻製ノ一重トシ長サ一米三三寸幅〇七二七米約二尺四寸重量一〇五疋約二百八十匁以上ノモノヲ使用スヘシ

ロ、袋ノ仕立方ハ其ノ小口ヲ太キ麻絲ニテ嚴密ニ縫合スヘシ

ハ、繩ヲ掛クル場合ハ一重俵裝ニ用フルモノト同シキ繩一筋ヲ以テ縱繩及横繩各一個所二重廻トシ縱繩ト横繩トノ交叉スル個所ハ捲掛トスヘシ

昭和十年六月十日印刷  
昭和十三年四月十五日四版發行

廣島縣農業教科書

定價 金參拾錢

著者 廣島縣教育會  
廣島縣青年教育研究會

印發行兼 廣島市堀川町七十六番地  
丸岡才吉



發行所

廣島市堀川町金座街  
會社名 廣文館

電話一七七一七二四番  
振替廣島一九二番



廣島縣教育會 共編  
廣島縣青年教育研究會

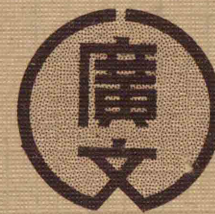
# 廣島縣農業教科書

(改訂版)

全八册  
定價各金參拾錢  
送料各金九錢

1 園藝篇  
2 土壤肥料篇  
3 作物篇  
4 養蠶畜產篇

5 病蟲害篇  
6 林業氣象篇  
7 農產加工篇  
8 農業經濟篇



広島大学図書

2000018056

